

2023 年夏
超短期海外派遣プログラム(スリランカ)
報告書
2023.9.2～2023.9.14

東京工業大学
グローバル理工人育成推進支援室



目次

1.派遣プログラム旅程と参加学生紹介	4
1.1.派遣プログラム旅程	4
1.2.参加学生紹介	8
2.スリランカの概要	9
2.1.人口、都市、産業など	9
3.LANKA NIPPON BIZTECH INSTITUTE (LNBTI)	11
3.1.LNBTI の概要、方針、教育課程、教育内容など	11
3.2.オンライン交流・学生の雰囲気について	12
3.3.現地での交流	14
3.3.1.Q&A セッション・日本文化体験	14
3.3.2.現地での交流・ウェルカムディナー等	17
3.3.3.ゴール旅行(LNBTI 学生との交流)	18
4.訪問先の詳細	20
4.1.コロンボ	20
4.1.1.占領の歴史	20
4.1.2.港湾の開発と諸外国との関係、政治的背景	21
4.1.3.レッドモスク, Independence Memorial Hall, Galle Face Green	23
4.1.4.コロンボ国立博物館、Study Abroad Expo	25
4.1.5.駐スリランカ日本大使館	26
4.1.6.JICA コロンボ事務所	27
4.1.7.コロンボドックヤード	28
4.2.アヌラーダプラ	29
4.2.1.歴史と技術	29
4.2.2.JICA 上水道整備事業	29
4.2.3.Central College Anuradhapura	31
4.2.4.その他訪問地	33
4.3.ミンネリヤ国立公園	36
4.3.1.象の生息の現状[10]	36
4.3.2.保護と人間との軋轢	37
4.3.3.動物保護区訪問から学べる事	38
4.4.シーギリヤ	39
4.4.1.歴史	39
4.4.2.シーギリヤロックの建築と街づくり	40
4.4.3.シーギリヤロックを登って感じたこと、学んだこと	42

4.4.4.Village Tour.....	44
4.5.ダンブッラ	47
4.5.1.歴史[17]	47
4.5.2.技術・建築等.....	48
4.5.3.感じたことや学んだこと	50
4.6.ワリヤポラ・マワネラ	51
4.6.1.シナモン農場訪問.....	51
4.6.2.現地の方との交流を通して	52
4.6.3.Lucky Land Spice Garden	53
4.7.キャンディ	54
4.7.1.キャンディの歴史と街づくり	54
4.7.2.JICA 下水道整備事業	54
4.7.3.紅茶産業の歴史、現状と課題（事前学習及び紅茶農園訪問を通して）	56
4.7.4.キャンディ湖と仏歯寺 Temple of the Tooth Telic など.....	57
4.8.ゴール	59
4.8.1.ゴールの歴史.....	59
4.8.2.STEAM プレゼンテーションと交流.....	59
4.8.3.ゴール旅行(訪れた場所)	60
5.スリランカの食、教育、スポーツ、建築	63
5.1.スリランカの食文化.....	63
5.2.スリランカの教育(高校での活動を通して)、日本との違い	69
5.3.スリランカのスポーツ(クリケット).....	70
5.4.スリランカの建築家バワについて.....	71
6.スリランカ個人感想	74
6.1.情報理工学院/数理・計算科学系/数理・計算科学コース M2	74
6.2.物質理工学院/材料系 B4	75
6.3.環境・社会理工学院/建築学系 B4.....	76
6.4.工学院/システム制御系 B3.....	79
6.5.工学院/電気電子系 B3	80
6.6.情報理工学院/情報工学系 B2	81
6.7.理学院 B1	83
引用・参考文献	85
謝辞.....	86
ACKNOWLEDGEMENTS	86

1.派遣プログラム旅程と参加学生紹介

1.1.派遣プログラム旅程

日付	時間	行程
9月2日	8:30	成田空港集合
	11:25	日本出発
	17:25	スリランカ到着
	20:00	ホテルでディナー
9月3日	10:00	コロombo市街見学
	11:30	Colombo National Museum 訪問
	13:00	Colombo City Centre のフードコートにて昼食
	14:30	Education Sri Lanka Expo 見学
	15:30	Independence Memorial Museum 訪問
	16:30	Galle Face Beach
	18:00	Crescat Boulevard にて Shopping
	19:00	Cinnamon Grand Colombo にて夕食
		(with JETRO コロンボ事務局所長大井様)
9月4日	10:00	マハラガマ LNBTI 到着
		JAPAN DAY 開催

	17:00	在スリランカ日本国大使館、大使との面談
	19:00	Crescat Boulevard にて夕食
9月5日	10:00	LNBTI 到着
		現地学生とコロンボ街歩き(伝統衣装交換など)
	13:00	LNBTI 出発
		アヌラーダプラへ
	19:00	ホテル近くのレストランにて夕食
9月6日	9:00	Central College Anuradhapura 高校訪問
		クリケット体験など
	13:00	アヌラーダプラ遺跡見学
	17:00	JICA 上水道整備事業に係るフィールド学習
	19:00	アヌラーダプラ遺跡見学再開
	20:00	SEEDEVI Family Restaurant にて夕食
		with JICA 上水道の方
9月7日	12:00	RUKMALI HOTEL にて昼食
	14:00	ミリネンヤ国立公園
	17:30	アーユルヴェーダ
9月8日	8:30	シーギリヤロック登山
	12:00	Village Tour に参加

	15:00	ダンブッラの石窟寺院訪問
	21:00	ホテルにて夕食
9月9日	12:00	シナモン農園訪問
	16:30	NEW LUCKYLAND SPICE GARDEN に訪問
	19:00	キャンディのフードコートで夕食
9月10日	9:30	紅茶工場見学
	11:00	Plant Genetic Resources Centre 内 Plants Sales Centre へ
	11:30	JICA 下水道整備事業に関わるフィールド学習
	15:30	仏歯寺などキャンディ市街見学
9月11日	13:00	LNBTI 学生とゴールへ向かう
	17:00	ゴール到着&ゴール市街見学
	20:00	SEA CAFÉ にて夕食
9月12日	10:00	ゴールの高校訪問
	13:30	ゴール市街見学
	18:30	LNBTI にてお別れ会
9月13日	9:00	JICA 事務局訪問
	11:00	コロomboドックヤード訪問
	14:30	紅茶局訪問
	16:00	空港到着

	19:50	スリランカ出発
9月14日	8:10	日本到着

1.2.参加学生紹介

	所属	学年
1	理学院	B1
2	情報理工学院/情報工学系	B2
3	工学院/電気電子系	B3
4	工学院/システム制御系	B3
5	物質理工学院/材料系	B4
6	環境・社会理工学院/建築学系	B4
7	情報理工学院/数理・計算科学系/数理・計算科学コース	M2

2.スリランカの概要

2.1.人口、都市、産業など

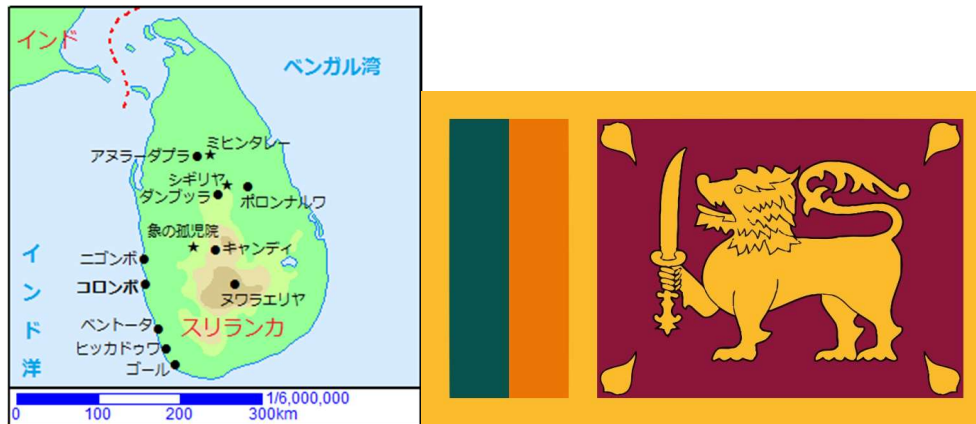


図 2.1.1 スリランカ地図[1]

図 2.1.2 スリランカ国旗

スリランカ（スリランカ民主社会主義共和国）はインド南東部のインド洋上に位置する緑豊かな島国である。総国土面積は 65,610km² で北海道の約 0.8 倍の大きさである。人口は約 2,200 万人である。首都はスリ・ジャヤワルダナプラ・コッテであり、国内最大の都市はコロomboでありかつては首都であった。熱帯地域に位置しており、年間平均気温は 27 度前後で一定しており、高温多湿の気候である。またモンスーンの影響により、12 月から 3 月までは北東の季節風が、6 月から 10 月までは南西の季節風が吹く。そのため気候は南西部と北東部で大きく異なる。南西部にあるコロomboの年間降水量は約 2,230mm で特に 4,5,10,11 月に降水量が多くなる。一方北東部にあるトリンコマリーの年間降水量は約 1,630mm でコロomboがある南西部に比べると乾燥しており、降水量は少なくなっている。

次にスリランカの国旗について記す。左側の緑色とオレンジ色はそれぞれイスラム教とヒンドゥー教を表している。また剣を持つライオンはスリランカのシンハラ王朝以来のシンボルである。そして四隅の葉は菩提樹でこの国の 70%を占める仏教徒を表している。

次にスリランカの歴史について記す。

紀元前 483	ヴィジャヤ王子が来島しシンハラ王朝を建ててアヌラダプラ王国を建国
紀元前約 300	アショーカ王の王子マヒンダが仏教を伝える
1815	キャンディ王朝が滅亡し全域がイギリスの植民地となる
1948	イギリス連邦内の自治領として独立

1972	国名を「スリランカ共和国」と改めイギリス連邦内自治領セイロンから完全に独立
1983	スリランカ政府とタミル・イスラム解放軍のトラ(LTTE)による内戦が始まる
2009	内戦が終結する

次にスリランカの言語と民族について記す。スリランカの主要言語はシンハラ語、タミル語で英語も使われている。民族構成は国民の約75%の人がシンハラ人で約10%の人がスリランカタミル人とスリランカムーア人である。そして残りの5%の人がインドタミル人である。またスリランカ全体の宗教割合としては70%が仏教で残りの30%をヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教で占める。そのためスリランカの世界遺産や建物はこれらの宗教に関連するものが多々ある。

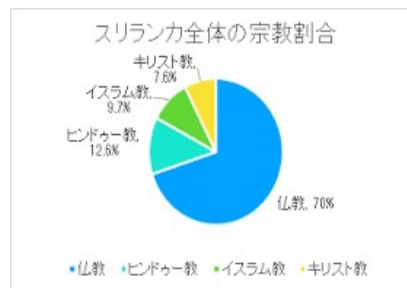
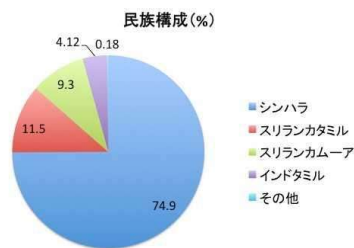


図 2.1.3 スリランカの民族構成

図 2.1.4 スリランカの宗教割合[2]

次にスリランカの主要産業について記す。スリランカの主要産業は農業（紅茶・ココナッツ・米）、繊維業である。特にココナッツと紅茶は世界4位のシェアを誇る。（2019年）それ以外にもバナナやマンゴーなどのフルーツの栽培でも有名である。

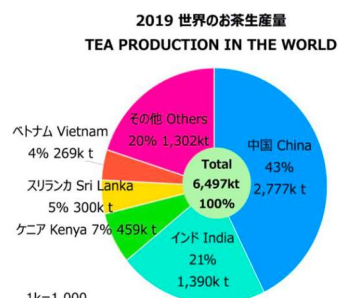
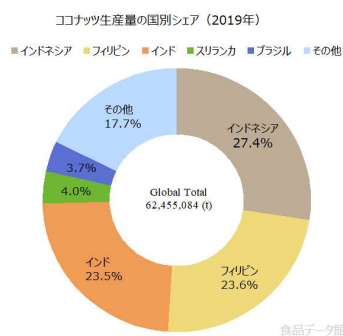


図 2.1.5 ココナッツ生産の国別シェア[3]

図 2.1.6 世界のお茶生産量

3.LANKA NIPPON BIZTECH INSTITUTE (LNBTI)

3.1.LNBTI の概要、方針、教育課程、教育内容など



図 3.1.1 LNBTI のロゴ

図 3.1.2 LNBTI のビル

図 3.1.3 LNBTI の学長 アーナンダ・クマラ氏[4]

LNBTI(Lanka Nippon BizTech Institute)とはスリランカにある、日本で働くことを目標にしている高等教育機関のこと。

LNBTI で目指しているものは

- ①日本の企業で働ける人材の育成
 - ②IT 業界で働ける知識の獲得
 - ③チームワークで学べる人材の育成
 - ④互いに教え合える人材の育成
 - ⑤日本のビジネスマナーなどを理解する人材の育成
- の5つである。

カリキュラムは3つのコースがあり、

- ①スリランカで3年間学び、日本の提携大学に編入できるコース
 - ②スリランカで4年学ぶことでイギリスのグリニッジ大学の学位が取得でき、その後日本で就職するコース
 - ③4年間でLNBTI 独自の学位を取得できるコース
- となっている。

講義の内容は日本語の授業や仕事のスキルとを身に着けるためのプログラミングの授業などがあり、将来日本で働くためのスキルをじっくりと身に着けるもので、多くの授業が日本で働く際に直接関わってくるものである。[5]

大学は(図 3.1.2)のようなビルの中にある学校であり、建物内には図書館や PC のおいて

ある学習室がそう。他にも卓球台やラウンジスペース、簡単なショップなど、学ぶ環境が一通りそろっている学校だといえる。また、日本で働くことを目的としているため、日本の文化に親しんでもらおうと、廊下に桜の造花やひな人形、日本語の挨拶の仕方の絵等が飾ってあった。また、スリランカは仏教徒が最も多いため、教室に仏教の旗があるのが印象的であった。(図 3.1.4 の天井にある四角形の旗)建物は学生さんでいっぱいとても賑やかであった。建物に飾ってある仏教の旗等はスリランカ独自のものだったと思うが、学校の雰囲気は日本の学校とさほど変わらないように感じた。

クマーラ先生の話によると、大学の経営としては、大学をどんどん拡大するための投資が多く、利益を生むことが難しい状況だが、教職員の給料をアップさせ、スリランカで一番給料の良い大学を目指しているとおっしゃっていた。また、学校に通う生徒も今後増えていくため、現在のビルに加え、別のビルにもキャンパスを作る計画があるとのことであった。



図 3.1.4 集合写真

3.2.オンライン交流・学生の雰囲気について

LNBTI の学生と全二回、zoom による交流を行った。

初回(7/26)は、東工大村上先生・LNBTI クマーラ先生の挨拶、お互いの学生の自己紹介、両大学からの紹介ムービーの発表、ブレイクアウトルームでの交流といった流れであった。時間の都合上、自己紹介は簡単なもので済ませた。LNBTI の学生は基本的に英語で自己紹介をしていたが、2,3 人の学生は日本語で自己紹介してくれた。ムービー発表では、お互いが事前に作成したビデオを視聴した。Ayumi、Noji、Kitamura、Daiki(体調不良により参加できず)、Shoji が東工大からのムービー作成を担当した。日本の文化や東工大の特徴、教育制度などについて説明した。LNBTI のムービーは、情報系学生が作成しているからか非常にクオリティが高く、比較すると我々のムービーが恥ずかしく思えた。スリランカの魅力的な観光地や文化が、美しい写真や動画とともに紹介されていた。



図 3.2.1 LNBTI の学生が作成したムービーのキャプチャ

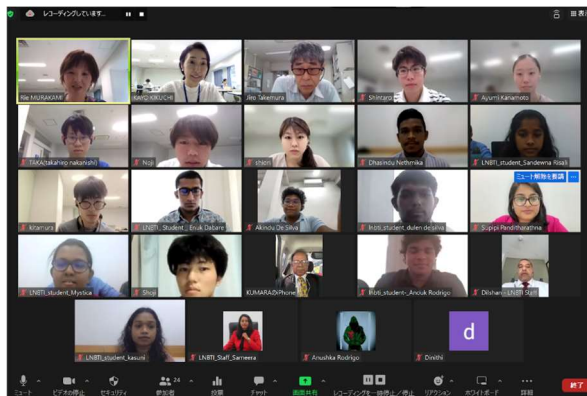


図 3.2.2 zoom 交流会の様子

第二回(8/18)は、東工大と LNBTI 合同のゴール旅行についての打ち合わせが主であった。LNBTI 学生からのゴールに関する短い紹介があった後、3つのグループに分かれてゴール旅行のプランニングをした。ビーチバレー、ゴール散策、カレーを食べる、紅茶を飲むなど、様々なやりたいことが挙げられた。なお、実際のゴール行は計画とは全く異なった形で行われた。実際の様子については報告書 3.3.3 および 4.8.3 を参照のこと。

二回の zoom 交流を通してお互いの距離が縮まったかといえばそれは微妙なところである。通信状況の問題と、複数人の学生が1つの PC から会話をしていたため、円滑なコミュニケーションが困難であった。最も大変だったことは、英語を正確に聞き取ることの難しさである。第一言語が英語ではないため、我々が普段英語学習で耳にする英語とは若干の差異があり、それに慣れるのに時間がかかった(もっとも、我々も英語は第二言語なので、お互い様である)。これらの理由から、zoom 交流では学生の雰囲気というものはあまりわからなかったが、なんとかしてコミュニケーションを取ろうとしている姿勢はお互いに伝わっていたと思う。現地での交流を通して、お互いの理解はぐっと深まることになる。

3.3.現地での交流

3.3.1.Q&A セッション・日本文化体験

Q&A セッション

9/4 午前中に LNBTI に到着。ここで初めてお互いが顔を合わせることになる。JAPAN DAY と銘打って開かれたイベントには 50 人ほどの LNBTI の学生が集まった。中には、LNBTI に入学して間もない学生も多くいた。東工大生 6 人(Taka は体調不良でこの日お休み)の自己紹介の後、Q&A セッションが始まった。LNBTI の学生が東工大生に向けて質問をしていくというコーナーで、質問に対して東工大生は 1 人ずつ英語で答えた。「今まで行った国は?」「日本でしていて楽しいことは?」など様々な質問があがった。大勢の前で英語で即興の回答をするという緊張もあり、あまり気の利いた回答はできなかった我々であったが、Kitamura はその限りではなかった。回答する順番が最後であった Kitamura は、きっちりオチをつけ会場を湧かせた。「好きな日本食は?」という質問に「もやし炒め」と返す Kitamura のセンスたるや。(もっとも、これに関しては LNBTI 学生にはまったく伝わっていなかったようであるが。)Kitamura のオモシロ回答のおかげか我々の緊張もいくらかほぐれたようである。その後、東工大生から LNBTI 学生への逆質問などもあり、お互いのことをよく知ったところで Q&A セッションは終了した。



図 3.3.1.1 Q&A セッションの様子。(左:東工大生、右:LNBTI 学生)

日本文化体験

昼食にピザを食べた後、日本文化体験のコーナーが始まった。これは我々が日本で事前に準備していた企画の一つである。昔の遊び・書道・折り紙の 3 つのブースを用意し、順番に回ってもらう形にした。この企画を行うにあたって必要な玩具や書道セット等の物品の一部は、東工大教職員の方々から提供していただいたものである。当日の準備に際して、LNBTI の教員の方々に設営を手伝っていただいた。日本語を話せる方々だったので準備はスムーズに進んだ。

昔の遊びブース

Shintaro と Noji が担当した。けん玉、駒、だるま落とし、カルタを体験してもらった。こちらがけん玉を紹介していると人が集まってきて、けん玉が足りなくなり他の遊びをやってもらった。けん玉は、なかなかうまくいかない人もいればすぐにできている人もいて、成功したら歓声が上がっていた。だるま落としでも、上手い学生が成功させると場は非常に盛り上がった。カルタでは、日本語で札を読んで伝わるか不安であったが、LNBTI 学生が日本語を勉強しているからか、存外すぐに札を取れていた。札が少なくなるにつれて盛り上がりが増し、皆楽しんでいたようである。日本の遊びでコミュニケーションをとることができ、貴重な経験となった。こちら側がけん玉に精通しておらず、コツを上手く教えることができなかった点が悔やまれるが、全体としてよいブースになったと思う。



図 3.3.1.2 昔の遊びブースの様子

書道ブース

Shoji と Shiori が担当した。硯、筆、墨、半紙など書道セット一式を日本から持ち込んだ。LNBTI 学生の名前を当て字にし、それを筆で書いてもらおうという形をとった。その場で名前を聞き、即座に当て字に変換する作業がたいへん難しく、事前にもっと準備をしておけばよかったと反省した。明確な人手不足になってしまったが、竹村先生に協力していただき、なんとか全員に書道を体験してもらうことができた。自分で書いた書と記念写真を撮るなど、楽しんでもらえたようである。我々が当て字を考えると必ずその意味を聞かれ、少々困惑した。ネットで調べながらなんとか答えたが、普段何気なく使っている漢字でも意味を聞かれるとパッとでてこないものがあり、こちら側も勉強になった。



図 3.3.1.3 書道ブースの様子

折り紙ブース

Ayumi と Kitamura が担当した。Kitamura が折り紙を折る様子を竹村先生のカメラで写しながら、Ayumi が学生の間を巡回してサポートする形がとられた。3 度のレクチャーのうち、1 回目はくす玉、2,3 回目は鶴を作成した。LNBTI 学生たちは作品が出来上がるやいなや写真を撮るなどしており、楽しんでくれたようである。LNBTI の学生は、普段やらない分色々難しかったと語った。くす玉も鶴も作ったことがない人がほとんどで、こちらも折り紙を教えたことがなかったのでお互いに良い経験になった。簡単そうなものを選んだつもりではあったが、LNBTI の学生には難しく、教えるのに一苦労した。



図 3.3.1.4 折り紙ブースの様子(左:折り紙を教える東工大生、右:折り紙を折る LNBTI 学生)

全体的に見て、LNBTI 学生はこの企画を楽しんでくれたようで、もともと決められた時間よりも 20 分ほどオーバーしてしまうほどであった。我々も日本の文化を通して交流をすることができ、非常に良い企画となったと思う。

今回のイベントで使用した折り紙、習字セット、けん玉、カルタなどの道具は全て LNBTI にプレゼントした。物品を提供してくださった東工大教職員の方々に感謝の意を表す。願わくは、今後も彼らに日本文化を楽しんでほしい。

3.3.2.現地での交流・ウェルカムディナー等

初日の夜には JICA, JETRO, 日本大使館そして LNBTI の先生達と共に夕食を頂いた。まず JETRO の方からスリランカにおける日系企業の現状と課題について話して頂いた。輸入輸出規制や金融規制が突如課されるケースがあり、政策の予見が困難等の課題があると聞いた。この話を聞いて、スリランカ等の発展途上国でビジネスを行う際にはリスクがつきまとうので、リスクとリターンを天秤にかけてビジネスを行う必要があると感じた。その後食事会として多くの方と話す機会があり、自分は LNBTI の先生達と話していた。そこで LNBTI は LNBTI の学生が日本の IT 人材として働けるようにする教育を行っていることや、スリランカの外貿貿易に関する現状などについて話し、非常に有意義な時間を過ごせた。

4 日目には LNBTI を訪れ、LNBTI の生徒と衣装交換した。東工大からは甚平や浴衣等の和服を渡し、LNBTI からは女性はサリー、男性はサロンというスリランカの民族衣装を貰った。自分はサロンというロングスカートを貰った。実際に来てみたところズボンを履くよりも涼しく、スリランカの温暖な気候に適している服装だと思った。そしてマハラガマの街を歩いた際には髪を切る機会もあった。自分は LNBTI の学生にスリランカで人気の髪型にして欲しいとオーダーした。すると LNBTI の学生が散髪屋の方に写真を見せてくれて、そのように切ってもらった。自分の散髪代は日本円で1000円程度で、友人の散髪代は300円と非常に安く驚いた。さっぱりして短い髪型になり短い髪型が好きな自分は大満足だった。



図 3.3.2.1 ウェルカムディナー

図 3.3.2.2 衣装交換会

図 3.3.2.3 ヘアカット後

3.3.3. ゴール旅行(LNBTI 学生との交流)

9/11、LNBTI 学生との交流を深めるため、東工大生 7 人と LNBTI 学生 7 人で 1 泊 2 日のゴール旅行へ出発した。コロombo の LNBTI で集合し、そこからバスでゴールへ向かった。ランチ休憩のためにサービスエリアに立ち寄った際、乗っていたバスがエンジントラブルにより動かなくなってしまった。代わりのバスが来るまで 1 時間ほど待ったように思う。その間、LNBTI の学生とお互いの文化について話し合った。私たちのグループでは、日本語学習や自動車の運転、教育などについて語らいあった。

ゴールのホテルに到着後、各自の荷物を置いてから 1 つの部屋に全員が集集合した。その目的は、25 歳になる Taka の誕生日をサプライズで祝うことであった。全員でハッピーバースデーを歌い、Taka がケーキのロウソクの火を吹き消した。Taka の 25 歳の抱負は「人生を全力で楽しむ」みたいなことだった気がする…。その場は大いに盛り上がり、全員でケーキを食べ(一部の学生は Taka に食べさせてもらっていた)、改めて Taka の誕生日を祝った。



図 3.3.3.1 Taka の誕生日会の様子

Taka の誕生日会の後、ビーチバレーをする予定だったが天候に恵まれず中止となった。代わりにトゥクトゥクに乗ってゴールで有名な土産屋に向かった。キーホルダーや衣服など様々な種類の土産が置いてあり、買い物を楽しんだ。土産品の多くはゾウに関係するものであり、カラフルなものが多かった。安めの価格設定であったため、買い過ぎてしまった学生も何人かいたようだった。その後海辺を歩いて近くのレストランに入り、14 人でディナーを楽しんだ。ホテルに戻った後、自由時間に「コヨーテ」という日本から持ってきたカードゲームをして LNBTI 学生と交流した。英語でルールを伝えるのは少々難しかったが楽しむことができた。また、スリランカで有名なトランプのゲームを教えてもらった。こちらも英語でルールを理解するのは難しかったが、何回かプレイするうちにルールを把握することができ、ゲームに熱中した。

2 日目、午前中は一緒にゴールの学校へ向かった。現地の高校生とのグループワークに協力してもらい、東工大生と LNBTI 学生が 1 人ずつペアになり、高校生のグループと話

し合いをした。私のグループでは、好きなスポーツやゲームの話などで盛り上がった(詳細は 4.8.2 を参照のこと)。ゴールの学校を後にして、一緒にゴール市街を散策した。様々な建築物を説明してくれて、勉強になった。ゴールの街並みやショッピング、写真撮影を楽しんだ。



図 3.3.3.2 宿泊先のホテル



図 3.3.3.3 夕食を食べたレストラン

ゴールの訪問場所については 4.8.3. に詳細が書かれている。

4.訪問先の詳細

4.1.コロンボ

4.1.1.占領の歴史

16 世紀までに、セイロン島中央部にキャンディ王国、低地にコーッテ王国、北部にジャフナ王国が成立する。

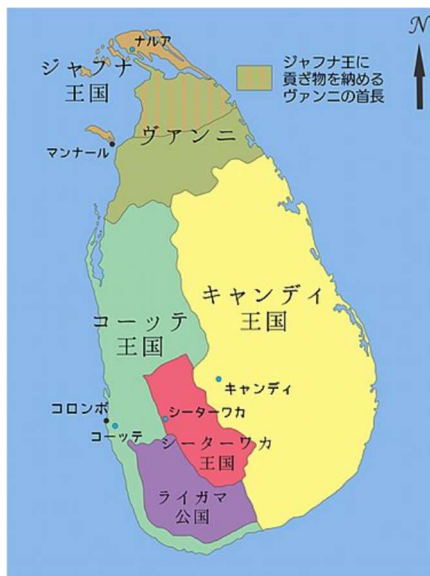


図 4.1.1.1 1520 年のセイロン島

植民地時代 - ポルトガル領セイロン(1505~1658)

16 世紀にポルトガル人がコーッテ王国に接触する。コーッテ王国を乗っ取った後、周辺のシンハラ人王国も征服していく。1565 年に首都をコーッテからポルトガル領のコロンボへ移動、1619 年にはタミル人のジャフナ王国を滅ぼすなどスリランカの支配を強める。この当時、ポルトガルによってシンハラ人・タミル人にキリスト教が布教され、軋轢を生んだ。その影響で現在でもスリランカ国民の約 8% はキリスト教徒である。セイロンの人々はオランダへ支援を求め、オランダは内陸のキャンディ王国と同盟を組む。オランダ・ポルトガル戦争の中で、オランダはアジアのポルトガル領を攻撃する。その流れで 1658 年にはオランダがコロンボを陥落し、ポルトガルからオランダへ領土が割譲される。

植民地時代 - オランダ領セイロン(1658~1796)

ポルトガル支配の終焉後、キャンディ王はオランダにポルトガルから奪取した要塞を協定に基づき引き渡すように要求するが、オランダはこれを拒否する。以降両国は度々衝突する。仏教・ヒンドゥー教には寛大で、カトリックに対しては強硬な姿勢をとる。1795 年

のフランス革命戦争によりフランスがオランダ本国を占領する。その間にイギリスは海外のオランダ植民地を攻撃。1796年には全拠点陥落、アミアンの和約・ウィーン会議でセイロンはイギリスへ割譲されることとなる。

植民地時代 - イギリス領セイロン(1815~1948)

イギリスは内陸に残るキャンディ王国の攻略を図り、1815年にはキャンディ条約でキャンディ王国を保護国とする。1817年のウバ州での反乱鎮圧後、イギリスはキャンディ王国を併合し全土を支配。これによりスリランカの王朝が滅びる。イギリスはこれまで支配の及ばなかった内陸部を開拓し、これにより輸送路が効率化される。この時代からセイロンで紅茶の生産が始まる。紅茶プランテーションの労働力としてタミル人が連れてこられ、少数派のタミル人を優遇する分割統治が行われることとなる。

独立時代

1948年、インド・パキスタンに続きイギリス連邦内の自治領セイロンとして独立。翌年、政府はセイロン市民権法を制定し、タミル人の市民権を剥奪する。1956年、スリランカ自由党が選挙に勝利する。シンハラ語公用語法案の制定、公務員からタミル人除外などシンハラ・オンリーの政策によりシンハラ人とタミル人の民族対立が激化。1972年、スリランカ自由党が選挙に勝利し、共和制に移行し国名をスリランカ共和国に改称する。この時期、世界初の女性首相であるシリマヴォ・バンダラナイケが就任する。タミルの新しいトラ(所謂タミルタイガー)が成立し、タミル人国家樹立を掲げて独立運動を開始する。1978年、大統領制に移行し、現国名(スリランカ民主社会主義共和国)に改称。シンハラ人とタミル人の民族紛争は1983年から26年間にわたって続いた。ノルウェーや日本の仲介で一時停戦に合意するも、2008年に政府は停戦合意を破棄、2009年にはタミルタイガーを掃討し、内戦は終結する。

現在は中国の「債務の罠」に陥っており、港湾の長期貸し出し(実質的な所有)などが行われている。

4.1.2.港湾の開発と諸外国との関係、政治的背景

コロンボ港はインド洋の中心という立地条件、水深の深さという自然条件に恵まれ、国際海上輸送において大きな役割を果たしてきた。コンテナの取扱量は世界33位(2013年)、南アジアでは1位の実績を誇っている。しかし近年では、予想を上回る貨物取扱需要の伸びに伴い、貨物取扱能力の不足が顕在化・深刻化しており、開発が急務となっていた。



図 4.1.2.1 コロンボ港の位置[6]

コロンボ港の開発に協力してきた主な 3 か国のうち 1 つ目は日本（JICA）である。コロンボ港の既存埠頭の開発や、北航路の浚渫（海底の土砂を除去する工事。水深が深くなり、大きな船も入港できるようになる）などの開発事業を円借款で支援してきた。結果としてコロンボ港の貨物取扱量は増加し、他にも船舶の入港までの待ち時間の削減、港湾の利便性・安全性向上といった成果が得られた。

二か国目はインドである。コロンボ港で取り扱われる貨物のうち、約 7 割が積み替え荷物だが、うち 7 割がインド関連と言われており、コロンボ港がインドにとっていかに重要な港かがよくわかる。2019 年には、日本・スリランカと共にコロンボ港内の東コンテナターミナル（ECT）開発事業を実施するための協力覚書を締結した。

近年存在感を増している 3 つ目の国は中国である。先述の ECT 開発事業は、スリランカ側が一方的に計画を変更し、中国企業への発注が決定した。また、巨大船の受け入れに十分な水深や、高いコンテナ移動・人員効率を誇るコロンボ国際コンテナターミナル建設、さらには総工費 150 億ドルかけて沖合を埋め立て、ハイテクオフショア金融センターを含むコロンボ・ポート・シティ建設などを行った。これらの政策の意図として挙げられているのが「一带一路」構想である。これは習近平国家主席が 2013 年に打ち出した構想であり、アジアとヨーロッパを陸と海を通してつなぐ、シルクロードの現代版ともいえる物流ルートをつくり、貿易を活発化させ、経済成長につなげようとするものである。[7][8]

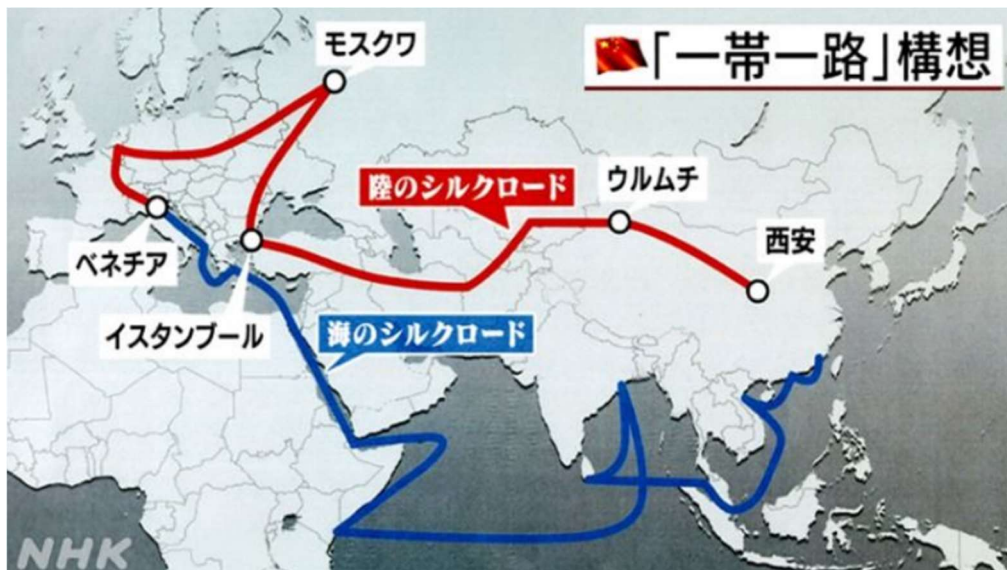


図 4.1.2.2 一带一路構想[9]

スリランカ滞在最終日に JICA 事務所を訪れた際、南部ハイウェイ建設事業については「アジア開発銀行（ADB）と区間を分けて実施した」とおっしゃっており、国際機関と分担・協力して実施した印象を受けた。その一方で、コロンボ港の開発に関しては、日本・スリランカ・インドが合同で行う予定であった計画が合意なく中国企業に渡ってしまうなど、関連各国が自国の利権を考慮に入れながら争っているような印象を受けた。この突然の変更は親中派の政治家が大統領となったことと関連があると知り、政治がいかに深く関わっているかを実感した。

4.1.3. レッドモスク, Independence Memorial Hall, Galle Face Green

レッドモスクについて

コロンボ市街を見学した日はあいにくの雨となってしまう、屋内を中心に回るようになった。レッドモスクは文字通り赤く染められたモスクのことであり、モスクとはイスラム教の礼拝堂のことである。正面から入ることは許されず、裏口のようなところから入った。イスラム教なので女性は布を被らされた。その派手な見た目とは裏腹に内部は大理石の落ち着いた空間となっていた。訪れた日は礼拝を行う日ではなく、我々のほかには職員と一組の観光客しかいなかった。それも相まってモスクの神聖さを感じることができた。



図 4.1.3.1 レッドモスク

Independence Memorial Hall について

Independence Memorial Hall では、スリランカがイギリスから独立した際の歴史を垣間見ることができた。内部には番号の振られた 28 枚の木彫りの絵が飾られており、スリランカの歴史が説明されていた。建物を支える石の柱には四面に特徴的な模様が彫られており、柱ごとにその模様が違い、感動した。



図 4.1.3.2 Independence Memorial Hall

Galle Face Green について

Galle Face Green はコロンボにあるインド洋に面した広大な緑地であり、多くの人でにぎわっていた。日本とは違い正月でもないのに凧がたくさん上がっており、その上それらはキャラクターをかたどった、日本では見慣れないものばかりであった。笛で蛇を操る蛇使いの人がおり、首に蛇を巻き付ける貴重な体験もできた。蛇使いの人を見たのは初めてだったので、突然の邂逅に驚くとともに、感動した。



図 4.1.3.3 コロンボの高層建築とにぎわう Galle Face Green

4.1.4. コロンボ国立博物館、Study Abroad Expo

コロンボ国立博物館について

コロンボ国立博物館では、スリランカの歴史的資料の数々を見学することができた。展示されているものは、古代のトイレからイギリスの剣まで種類、年代ともに多岐に渡ったが、なかでも仏教、ヒンドゥー教関連のものが目立っていた。しかし、日本の仏像とは違い、色彩豊かなものが多く、同じ宗教でも国によって大きな違いがあることを実感できた。また、昔の貯水施設を再現したミニチュアや、田園での作業風景を再現した人形など、遺産以外の資料も非常に充実していた。



図 4.1.4.1 昔の作業風景の展示

Study Abroad Expo について

Educate Sri Lanka Colombo Expo 2023 ではお世話になった LNBTI を含めた様々な教育機関の活動内容を見て回った。多くの教育機関が海外への留学や就職を目玉として打ち出しており、なかでも日本の人気は際立っており、一緒に集合写真を撮ってくれと言われたりもした。海外留学の他にも、歌手や海軍士官になれることを前面に押し出している学校

など、日本とはかなり違った教育の一面を知り、かなり驚いた。



図 4.1.4.2 LNBTI の関係者との集合写真

4.1.5.駐スリランカ日本大使館

9/4、我々はコロンボにある駐スリランカ日本大使館を訪問した。入口では持ち物検査が行われたり、内部への扉が頑丈な二重扉になっていたりと、セキュリティが非常にしっかりしているという印象を受けた。スリランカ駐劄日本国特命全権大使の水越英明大使からスリランカの歴史と外交についてお話を伺った。以下に、水越大使のお話の要約を記載する。

スリランカには現在、シンハラ人・タミル人・ムーア人の3つの民族が主に暮らしており、人口の約75%がシンハラ人である。1983年には民族間の対立が起こり、シンハラ人と「タミルの虎(LTTE)」との闘争が激化する。2009年には政府がLTTEを鎮圧し、民族紛争は終わりを迎える。2019年にはイスラム過激派による自爆テロが勃発する。このように民族間での争いが絶えないスリランカであるが、ノルウェーと日本がその仲介を行っている。明石康氏はスリランカの平和構築の業績でスリランカ政府から勲章を授与されている。紛争に関して、政府によるタミル人勢力抑圧の際の民間人への攻撃や降伏後の攻撃が欧米からは非難されている。タミル人の中には移民として海外へ移住する者もあり、移住先はカナダ、イギリス、ドイツが主である。

2022年にスリランカは財政破綻を宣言した。その時の借入先は1位が中国で、次いで日本、インドといった形である。借金の返済については、現在も話し合いが行われている。スリランカは中国の「債務の罠」にはまってしまっており、港湾の99年間の貸し出し(実質的な所有)などの拘束を受けている。日本はスリランカに対して中立の立場であることを心がけており、民族間の対立にも慎重に向き合っている。ロシアとは古くから関わりがあり、スリランカへの観光客の中にはロシア人も多いという。紛争時の過度な攻撃について

欧米からは批判があがる一方、中国やロシアは人権問題を嫌うため非難はない。スリランカが中国・ロシアに頼りきりにならないよう、中立な立場で外交を行う日本の存在が極めて重要である。スリランカは現在、様々な国からの借金の影響で種々の問題において板挟みに悩まされるケースが多い。インド・中国間の問題では、港の使用許可でトラブルが生じた。スリランカは同盟や連合体に所属しておらず、それゆえ立場がはっきりしないことが問題となっている。ASEAN のような連合体への所属が必要とされている。

東工大生から水越大使への質問の時間には多くの質問があげられ、学生は皆積極的にスリランカの外交問題について学ぼうとしていた。最後に記念撮影をして、その場は解散となった。スリランカの外交問題と日本の関わり方に関するリアルな話を聞くことができ、非常に貴重な経験となった。



図 4.1.5.1 訪問時の記念写真。下段中央は水越大使。

4.1.6.JICA コロンボ事務所

9月13日コロンボにある JICA コロンボ事務所を訪問し、国際協力機構スリランカ事務所長の山田哲也様からお話を聞かせていただいた。JICA は日本の ODA を一元的に担う国の機関である。JICA の活動目的や事業について、スリランカについて、スリランカでの JICA の取り組みについて伺った。JICA の協力メニューには技術協力、有償資金協力、無償資金協力、民間連携、市民参加協力、国際連携援助の 6 つがあり、真に開かれた日本であり続けるために開発教育なども行なっている。日本の ODA 案件がスリランカ紙幣になるほどスリランカと日本との協力関係の歴史は深いということに対し驚いた。たくさんのお話を一言でまとめると、JICA は国創りの支援をしていることがわかった。ここで、スリランカの問題点として、インフラが未整備であること、地域格差があること、変化に脆弱であることの 3 点を挙げていた。これを聞いたとき、日本と比較するとわかりやすいように感じた。インフラが未整備の状態での発展はある程度の限界があるため、まずインフラ

整備に取り組んでいる JICA の行動理由が納得できた。具体的な貢献は 350 万人に安全な飲み水を提供すること・電力供給能力の 12%を担っている・スリランカ的高速道路ネットワーク 272km のうち、JICA の協力にて 32%の 86.5km を建設した・200 人を日本留学(修士・博士)させたことなどがある。これからも JICA の活動に注目していきたい。



図 4.1.6.1 JICA コロンボ事務所訪問

4.1.7.コロンボドックヤード

スリランカ滞在最終日にコロンボドックヤードに訪れた。コロンボドックヤード社は造船会社であり、船の製作と修理を主に行なっている会社だ。コロンボドックヤード社はスリランカ最大の日系企業で、日本と欧州を船で往来する際の最重要中継地点である話を聞いた。その際にスリランカ人は非常に優秀だが、仕事の進捗具合を誤魔化す癖があるという話を聞いた。具体的には some issues there は 30%、Under Control は 50%、No issue は 80%仕事が終わっているといったものだった。このような話から、外国ではその国の文化を理解してスケジュール管理等の仕事に取り組むことの大切さを学んだ。次に作業服に着替えてコロンボドックヤード内を見て回った。敷地内は非常に広く、船の部品の組み立て場から全体の組み立て場まで幅広く見学できた。職業学校や食堂、パンの製造場も見せて頂き、まるで1つの街のようで何千もの職員が働いているようだった。その後昼食をご馳走して頂いた。社長の方がユーモラスな人で、硬い雰囲気はなく雑談形式で様々なスリランカに関する雑談をして頂き、非常に楽しい時間を過ごすことができた。



図 4.1.7.1 コロンボドックヤード食事会



図 4.1.7.2 船の修理

4.2. アヌラーダプラ

4.2.1. 歴史と技術

アヌラーダプラはスリランカ北中部にある古都で、その歴史はスリランカの始まりの歴史といっても過言ではないほど発展が大きく、スリランカの世界遺産のひとつである。

- 紀元前 4 世紀 アヌラーダプラがシンハラ王朝の首都として建てられる
- 紀元前 247 年 インド本土のアショーク王の息子、マヒンダにより仏教伝来
- 5 世紀 11 年間のシーギリヤへの遷都。南インドのチョーラ朝から侵略を受ける。
- 10,11 世紀 国と王都は崩壊し、中心地は南部に移っていく。
- 20 世紀 遺跡が再発見され、保護修復が行われる。1982 年には世界遺産登録。

古都として発展していたアヌラーダプラはその文化や技術を南インド地域と共通していた。年に一度しかない雨季の水を利用するための灌漑技術は 5 世紀ごろからあったようで、それに付随して水田耕作や灌漑用の人工の湖をつくるための土木技術も発展していた。また鉄器文化について、紀元前 1200 年までに成立していたとされていた。スリランカにおける鉄器時代の始まりを示す考古学的証拠はアヌラーダプラで発見された歴史があり、このことから南インドとの強いつながりがうかがえる。

4.2.2. JICA 上水道整備事業

9 月 6 日午後には上水道整備施設に訪問し、事業に関する説明を聞いた後、実際に上水の設備を見学した。写真は見学の際に撮ったものである。左下の写真は実際に上水が飲み水へと変わる過程で撮影されたもので多くのフィルターや化学反応を利用して物質の分離が行われる。右下の写真は施設内の設備を一括で制御している部屋のモニタを撮影したも

のである。見学をしながら現場職員らしき人が少ないと感じていたが、この部屋を訪れて機械化、自動化が進んでいるのだと分かった。



図 4.2.2.1 上水処理の過程のフィルターの 1 つ

図 4.2.2.2 設備を制御する部屋のモニター

上水道整備において 98%が完了しているフェーズ 1、今後展開していくフェーズ 2 という 2 つの事業の説明を受けた。事業自体は上水を利用して飲み水を各地に提供することを目的としている。地下水は中に入っているものの人体へのリスクを考えると利用できないことから湖からの水を浄水する設備を作る必要があった。2011 年の地域調査からプロジェクトは始まり、対象地域は農場をメインとしたアヌラーダプラの北部である。JICA の協力は主に 2013 年に始まり、その年には地域の再調査が行われ、フェーズ 1 遂行において JICA の支援が欠かせなかった。しかし、治水はほとんど完成しているものの利益を生み出すことの難しさから JICA への債務不履行が生じてしまった。フェーズ 2 に向けての支援を受け入れられない現状となっており、事業を遂行することの難しさを実感した。

印象に残った話は事業を進めるうえでの問題点である。実際に事業が成功すれば多くの人に飲み水が提供できるが、技術を持った人員が不足していることや限られた水を飲み水への浄水に使うことに対して地元農家の賛同が得られなかったことが大変であったようだ。日本で当たり前のように飲んでいる水の貴重さを理解するとともにスリランカでより多くの飲み水が提供されることを願うきっかけとなった。



図 4.2.2.3 見学中の様子

4.2.3. Central College Anuradhapura

6日の午前中にはアヌラーダプラの高校 Central College Anuradhapura に訪問し学生交流を行った。学生は6～13年の8学年であり、日本の高校と同じように制服を着ていた。制服は上下真っ白で非常に目立つ格好の他、女子生徒が校則で髪をおさげにしてネクタイもしていたのが新鮮であった。



図 4.2.3.1 高校前にて、生徒たちは真っ白な制服を着ていた

交流プログラムはまず体育館で始まった。日本学生による折り紙プログラムが予定されていたことを当日に知り、当日はアドリブでの対応となったのが面白かった。LNBTIで折り紙ブースを開いていたおかげでなんとか折り鶴を学生皆で折る企画を成功させることができた。その後、女子生徒による日本のダンスを見せてもらった。浴衣を着て傘を振りながら日本の曲に合わせて踊っていて、完成度が高く楽しいパフォーマンスであった。



図 4.2.3.2 折り紙プログラムの様子

図 4.2.3.3 現地女子生徒による日本のダンスパフォーマンス

その後、高校のクリケットチーム指導のもと、クリケット体験を行った。クリケットは日本ではあまり馴染みのないスポーツだがスリランカをはじめとした南アジア近辺では国民に愛される伝統的な競技である。ちょうど訪問中にはアジアカップが開かれていてその人気ぶりはホテルや街中のテレビで試合が流れているほどである。実際にやってみるとボールを投げるのも打つのも難しく、野球やテニスと感覚は近いもののコツをつかむのに苦労した。それでも 2 チームに分かれて行った試合では現地の学生に教えてもらったおかげで攻守 1 回ずつ行うことができ、存分に楽しむことができた。チームの学生とも言葉だけじゃないコミュニケーションをたくさん交わすことができ非常にいい経験となった。



図 4.2.3.4 現地学生とのクリケットの様子

驚いたのは学校をあげての熱烈な歓迎ぶりである。多くの学生と写真を撮りコミュニケーションをとった。SNS を交換した生徒からは訪問後も多くのダイレクトメッセージが届き、先生や学生の活気と温かさに心動かされ、楽しい時間を過ごすことができた。

4.2.4.その他訪問地

アヌラーダプラはスリランカ史上最大の仏教都市として有名である。遺跡群の訪問からそのことはよくわかった。アヌラーダプラはスリランカの仏教布教の基点とされている。以下、アヌラーダプラでの訪問地である。

菩提樹寺

仏教伝来の際に持ち込んだとされる、ブッタが瞑想していた菩提樹の小枝が栽培されたものと言われている。2000 年以上の歴史があり多くの観光客がいた。19 世紀にはゾウなどの野生動物から菩提樹を守るために周囲に柵が設けられた。多くの人が祈りを捧げに来ていて、スリランカの仏教信仰の根強さを実感した。



図 4.2.4.1 菩提樹寺

遺跡群

アヌラーダプラ遺跡群には歴史ある仏塔や建物の跡が密集している。下の写真はアバヤギリ仏塔で、もともとスリランカの大乗仏教総本山である。現在スリランカでは上座部仏教が主流となっているものの修復を重ねながら残されてきた。高さは当時 110m であったが今は 75m でそれでも現存するアヌラーダプラのダーガバ(仏塔)の中で最大のものでその迫力はすごかった。



図 4.2.4.2 アバギリヤ仏塔



図 4.2.4.3 ムーンストーン

ところで遺跡では右上の写真のような半円形の彫刻された石をよく見かける。これはムーンストーンとよばれるもので牛や馬などの動物が連なって描かれている。人の一生と転生を表した仏教の輪廻思想の象徴でありこの石からも仏教との深いつながりを感じた。



図 4.2.4.4 クッタムボクナ

上の写真はクッタムボクナと呼ばれる沐浴場である。周囲の僧院で修行していた僧たちの沐浴に使われていた。2つあるのは女性用と男性用ということであった。

また、遺跡群内にはたくさんの野生の猿がいたのが印象的であった。



図 4.2.4.5 遺跡内にいた猿の親子

ルワンウェリ・サーヤ大塔

9月6日にはルワンウェリ・サーヤ大塔を訪れた。ルワンウェリ・サーヤ大塔はアヌラーダプラの中心にあるシンボルであり、アヌラーダプラ遺跡地区の中心に立っている。そしてこれは紀元前2世紀に造られたとされており、ドゥッタガーマニー王とその息子サッターティッサ王子の時代に造られた。上から見て時計回りが参拝順路であることや、写真を撮るときにルワンウェリ・サーヤ大塔に背を向けてはいけないと言ったルールがあり、

現地の人から指摘された。こう言ったルール他にスリランカの遺跡大半に言えるルールとして靴を脱ぐことや女性は肌を露出させないなどがある。

また、バスガイドさんがルワンウェリ・サーヤ大塔は上から見ると正円ということを証明する方法を教えてくれた。それは、どんな身長の人であっても、大塔の縁につま先を合わせて立つと大塔の先端部は見れないが、1 フィート分後ろに離れると必ず先端部が見えるようになるという事実だとおっしゃっていた。それを伺い、面白い考え方だなと思ったが、どうやってその正円を作ったのかに興味を抱いた。



図 4.2.4.6 ルワンウェリ・サーヤ大塔(全体)

図 4.2.4.7 ルワンウェリ・サーヤ大塔の先端部(図 4-2-5-1 の赤丸)の拡大図

4.3. ミンネリヤ国立公園

4.3.1. 象の生息の現状^[10]

スリランカに生息している象はアジアゾウと呼ばれる種である。アジアゾウはそこから四種類の亜種、インドゾウ、セイロンゾウ、スマトラゾウ、ボルネオゾウに分類されるが、スリランカに生息しているのはセイロンゾウである。アジアゾウはレッドリストにおける「EN(絶滅危惧種)」に分類される種であり、セイロンゾウ自体も一時期絶滅が危ぶまれていた。生息圏は主にジャングル地帯であるが、近年の開発によって人間の居住圏と重なる部分もあり、我々も車道沿いの林で象達を複数回に分けて八頭ほど目撃した。もちろん、こちらから象達を刺激するようなアクションは起こさなかったが、子連れの象もいる中で、どの象もこちら側に対して何かしらの反応を見せるということが全くなかったのが印象的であった。生息数は 18 世紀以前と比べて約 65%減少していると考えられ、現在は推定 2500~4000 頭が生息しているとされている。我々もほとんど見かけなかったが、セイロンゾウは大きな牙を持つ個体が少ないため、密猟よりも生息地の減少が個体数激減の原因と考えられる。



図 4.3.1.1 車内から撮影した象

4.3.2.保護と人間との軋轢

前述の通り、人間の居住圏と象の生息圏が重なるということが起こっている。それに伴い、列車や自動車に象がはねられるという事件や、象が人間の家屋を襲うという事件が年間何件も発生している。現地の人から聞いた話では、シナモン農家が襲われやすいらしい。そして、象に家族を奪われた人間が報復するというように、象と人間との軋轢が生まれてしまっている。対策として、象と人間の接触を防ぐためにジャングルに近いところでは、電線がいたるところに張られている。このように人間と象の被害を防ぐための対策はさまざま施されている。その一つに象の保護区というものがある。我々が訪れたミンネリヤ国立公園もそれに該当する。そして、ジープでの見学などによって象を商業的に活用することによって、先述した象と人間との軋轢を解消することに繋がっている。我々が留学中に接した現地人の中に象に対して嫌悪感を抱いているという風な人はおらず、あまつさえ学生にはお土産として象の置物をいただいた。象と人間との軋轢は解消されつつあるのかもしれない。



図 4.3.2.1 道路脇にいる野生の象

4.3.3.動物保護区訪問から学べる事

保護区ではジープに乗って見学を行った。訪れた環境は、大別して森林と平原に分けられる。森林地帯ではジープを前に姿を現した動物はあまり多くなかったが、それでも日本ではなかなかお目にかかれない、鷹や猿などの動物たちに出会うことができた。平原では象を除いてほとんど動物がおらず、完全に象の見学のためのエリアであった。我々が国立公園を訪れた時は、天候が不安定な中ということもあり、象と遭遇できるか危ぶまれていた。しかし、我々は幸運にも 100 体近くの象と出会うことができた。これは悪天候関係なくめったにないことらしい。象達は他の動物たちとは違い、我々にあまり警戒心を見せることなく近づいてきてくれた。前項で述べたことの繰り返しになるが、子連れであってもこちらに威嚇行動をとることはなく、我々はかなり接近することができた。このようなことに感動していたのもつかの間、のんきに見学をしていた我々にとって衝撃的な出来事が起こった。他の観光客のジープの前に象が立ちふさがり、威嚇していたのだ。象と人間との共存につながる商業利用であっても、それが象にとって喜ばしい者とは限らず、保護区の存在の難しさを考えさせられた。[11]



図 4.3.3.1 水辺に群がる象

4.4.シーギリヤ



図 4.4.1 シーギリヤロックとそのふもとの遺跡

4.4.1.歴史

シーギリヤロックの歴史はカッサパ(カーシャパ)1 世が宮殿を作り始めたことから始まる。

- 477 年 シンハラ王朝であった父を殺害し、王位を奪取
弟による復讐を懸念してアヌターダプラからシーギリヤに遷都
- 484 年 シーギリヤロックの頂上に宮殿が完成
- 495 年 弟に攻め込まれ、陥落
- その後仏教僧に寄進され、13,14 世紀ごろまでは存続するも衰退。
- 1875 年 シーギリヤレディ発見
- 1982 年 世界遺産登録

477 年に父を息子が殺し、王位を奪取したのちにシーギリヤに都市の建設を開始したが、殺した原因は親の財産をねだった際に親の功績が農業の発展であり、ため池を財産といわれ、怒ったためだといわれている。

また、実際にあった出来事かは不明だが、父に仕えていた人々が殺されたショックで

次々とシーギリヤロックの上から飛び降りたといわれ、その数は5000人にのぼると考えられている。[12][13]

4.4.2. シーギリヤロックの建築と街づくり

シーギリヤロックのふもととシーギリヤロックの頂上には古代の建築の遺跡が残っている。遺跡にある古代技術などについて説明する。

① 水利技術

スリランカでは昔から水利技術が高かったが、シーギリヤロックの水利技術には目を見張るものがあり、以降で説明していく。[14][15]

噴水

シーギリヤロックのふもとには噴水がある。これは標高が少し高いところに水を貯め、地下にある水道管を通じて遺跡内の噴水から湧き出てくる仕組みである。現在でも雨期になると水がたまり、噴水から出てくとの説明があったが、今回訪れた際は乾季だったこともあり、水は出ていなかった。



図 4.4.2.1 噴水につながっているといわれているため池

図 4.4.2.2 噴水 小さな穴が開いており、ここから水が出るといわれている。

図 4.4.2.3 噴水から水が出ている様子(購入した現地の写真集より引用)

宮殿を囲む水路

宮殿を水で囲むことで敵からの防御になっていた。現在でも水があり、ハスの花が咲いている。かつてはワニが住んでおり、水に落ちた人間は戻ってこなかったといわれている



図 4.4.2.4 宮殿を囲む水路

大小さまざまなため池

スリランカには雨季と乾季があるため、乾季の際に水が必要になる。そのため、古代から水を蓄えるための人工のため池があった。(図 4.4.2.5 および図 4.4.2.6)

園内には多くのため池が作られていたが、遺跡内にあったため池には水を蓄えるだけでなく、都市を冷やす役割もあった。実際に現地を歩くとかなり涼しく、湿度も高すぎないので歩きやすい環境であった。



図 4.4.2.5 現在でも水が溜まっている大きなため池



図 4.4.2.6 小さなため池も残っている

これらの水利技術は日本と共通するものもあると感じた。例えば、ため池は日本では香川県のような雨の少ない地域で昔から使用されていた。また、宮殿を囲む水路は日本の城でよく見られるもので、敵からの防御という役割を持つ。そして宮殿に水の庭園を配置することで都市を冷やすという考えは現代の都市に必要な考えであり、ヒートアイランド対策として活用できると考えられる。

②建築や都市のなごり

シーギリヤロックを降りると、かつて会議として使われた石が残っており、かつて首都として機能していたことがうかがえる。



図 4.4.2.7 中央に王が座り、その周りに大臣が座っていたといわれている。

図 4.4.2.8 水が岩の下に入らない仕組み

例えば、岩の下に部屋を作る際に岩に切り込みを入れることで水が下に部屋の中に入っ
てこないようにする仕組みが見られる。図 4.4.2.8 の黒い岩肌と白い岩肌の境界に段差があ
るのが見られる。これにより水が部屋に入ってこなかったと考えられている。

4.4.3.シーギリヤロックを登って感じたこと、学んだこと

遺跡からシーギリヤロックに上っていくとまず石でできた門が見える。これは敵の侵入
を防ぐためのものでゾウが通れない大きさであった。これはかつてスリランカでは日本の
騎馬隊のようにゾウにのって攻撃をしていたためである。



図 4.4.3.1 石でできた門



図 4.4.3.2 ライオンの足の形の石

階段を上っていくと大きな足が見える。(図 4.4.3.2)これはライオンの足といわれており、真実はわからないが、かつてシーギリヤロックがライオンの形をしていた時の名残といわれている。(図 4.4.3.3)



図 4.4.3.3 かつてのシーギリヤロック(イメージ)

図 4.4.3.4 頂上にある遺跡

引き続き階段を上るとシーギリヤロックの頂上に古代の遺跡が残っている(図 4.4.3.4)。頂上の庭園は階段状になっており、岩の形に添って建設されたことが考えられる。頂上にはため池があり、訪問したときは乾季であったにも関わらずため池に水が残っていた。[16]



図 4.4.3.5 頂上で見られたため池。水が残っている

図 4.4.3.6 頂上からみた景色 中央に見える線が4-4-2で取り上げた遺跡

頂上から見る景色が自分の中で印象に残った。平地いっぱいにジャングルが広がっていた。日本の平地は都市や田畑が広がっているケースが多いため、日本では見られないような景色で印象に残った。

また、ロックの中腹にはミラーウォールがあり、かつては表面に自分の顔が映るほどきれいに塗装されていたといわれている。

自分の顔は映ってはいなかったが、壁が滑らかに塗装されているのが印象的であった。

また、その近くには絵があり、シーギリヤレディが有名である。

現在でも絵がくっきりと残っている。これはかつて何度もプラスターを塗って絵を仕上げたためである。絵の内容は仏教関連のものや花を運ぶ女性であり、ここから当時の生活を想像することができた。



図 4.4.3.7 ミラーウォール



図 4.4.3.8 シーギリヤレディ(撮影禁止のため、購入した現地の写真集より引用)

4.4.4.Village Tour

シーギリヤロック見学の後、地元の農家の暮らしを体験できる Village Tour に参加した。まず牛車に乗り土の道を走り、その後船に乗り換え、農村を目指した。思ったよりもスピードが速く、車輪がゴムではなく、木に鉄を巻いて作られたものなので、ガタガタと揺れていた。船に乗っている途中蓮の葉で帽子を作っていた。このことから現在でも自然のものを活用して生活していると感じることができた。



図 4.4.4.1 乗った牛車



図 4.4.4.2 船に乗り込む様子

その後農村につき、お昼ご飯となった。農村の家は土の壁に木の柱、ヤシの木の葉っぱでできた屋根で構成されていた。また、図 4.4.4.4 の写真にあるように屋根と壁の間に隙間

があるので外から風が入ってきてくるため、半屋外という風で気持ちよかった。



図 4.4.4.3 ハスの葉で作られた帽子と農村の家の外観

図 4.4.4.4 農村の家の内観

まずココナッツを頂いた。外側の大きな皮をとがった木の枝にさしてむいていく。(図 4.4.4.5)その中に固い実があり、その中にココナッツジュースが入っていた。固い実の中には白色の実があり、それを食べることができた。

ココナッツはそのまま飲んだり食べてみても特に味はしないのだが、日本のお米のように長く口の中に入れておくとかなり甘く、おいしかった。

また、白色の実は削ってパウダーにすることができ(図 4.4.4.6)、それを直接カレーにかけたり、唐辛子と塩を混ぜて辛くしてカレーにかけるなど、味を調えるのに大切なものであった。(図 4.4.4.7)



図 4.4.4.5 ココナッツの皮をむく様子

図 4.4.4.6 ココナッツの粉を作る様子

図 4.4.4.7 辛くしたココナッツパウダー

ココナッツの液体の入っている固いからはそのままお皿に使うことができ、これもココナッツを余すことなく使っており、自然のものを最大限活用しているとわかった。料理はカレーを頂いたが、その際に自分はパパダムという薄いおせんべいのようなものを作らせてもらった。

パパダムは熱した少量の油で揚げるとすぐに表面が凸凹してきてパリパリになった。す

ぐに油からあげる必要があったが、初めは油に長くつけてしまい、焦げてしまった。



図 4.4.4.8 パパダム 奥が油で揚げたもの

図 4.4.4.9 スリランカカレー 料理の中央にあるものがココナッツパウダー

昼食後ヤシの木の葉っぱで屋根を作った。(図 4.4.4.10)屋根は1年に一度交換していると説明されていた。葉を布のように上下交互に入れていることで屋根が出来上がっていく様子が印象的であった。



図 4.4.4.10 屋根を作る様子

図 4.4.4.11 建物の屋根

Village Tour に参加してわかったこととして、現地の人々は自然にあるものを最大限利用していることがわかった。日本でもかつて自然にあるものを最大限活用して生活してきたと教わったことがあるが、現代の大量消費社会の日本において忘れられた考えのような気がした。また、自然の風を建物内に取り込むことで快適に過ごしているともわかった。こちらも近年はエアコンに頼りっぱなしの日本で忘れられた考え方だと感じた。一方で現代の技術も活用されていた。例えば、村を動物から守る柵には電気が流れていた。

このように、Village Tour では自然のものを活用しつつ、現代の技術も取り入れることで生活がより安全、快適になっていると学ぶことができた。

4.5.ダンブッラ

4.5.1.歴史^[17]

スリランカ中央部には、アヌラーダプラ、ポロンナルワ、キャンディの3都市を結んだ三角形の内側に多くの遺跡が残っており、文化三角地帯と呼ばれている。ダンブッラはこの三角形の中心に位置し、153の釈迦像、3つのスリランカ王の像、4つのヒンドゥー教の神像を収容するスリランカ最大の石窟寺院があることで知られている。寺院内には5つの洞窟があり、それぞれに名前がついている。この寺院は高さ180メートルの「ランギリ（黄金色に輝くという意味）」と呼ばれる山の中腹に位置していることから、正式には「ダンブッラの黄金寺院」と呼ばれている。高所に位置する寺院のため視界を遮るものが何もなく、また私たちが訪れた際は天気にも恵まれたため、約20キロ離れた場所にあるシーギリヤロックを遠くに望むことができた。



図 4.5.1.1 文化三角地帯^[18]

図 4.5.1.2 タンブッラ石窟寺院

紀元前3世紀 修行の場として開窟が始まる

紀元前1世紀 シンハラ王朝のワッタガーマニー・アバヤ王が戦勝を記念し寺院を建立

1915年 第5窟が修復される

1991年 世界遺産に登録

4.5.2.技術・建築等

第1窟 デーワ・ラージャ・ヴィハーラ

「神々の王の寺」の意。5つの石窟の中で最も古く、中には約14メートルもあるこの寺院最大の仏像が横たわっており、フラスコ画も鑑賞することができる。この仏像の左右の足を見てみると、つま先が揃っていないことがわかる。これは釈迦の状態を表しており、揃っているものは単に休息中（存命中）であることを意味し、このようにずれているものは涅槃仏（入滅後＝亡くなった後）であることを表しているとのことだった。

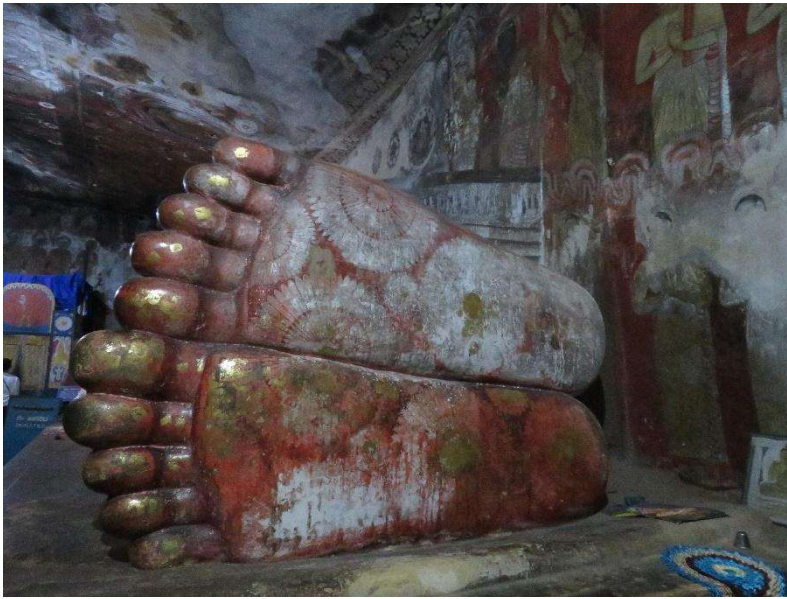


図 4.5.2.1 第1窟内の涅槃仏

第2窟 マハー・ラージャ・ヴィハーラ

「偉大な王の寺」の意。ダンプッラ最大の洞窟で、16体の釈迦の立像、40体の釈迦の座像、涅槃仏の他に、ヒンドゥーの神の像など多くの像が安置されている。また、壁や天井一面にはスリランカの歴史などを表す壁画が描かれている。天井から水がしたたり落ちている所があり、ダンプッラ（＝「水の湧き出る岩」の意）の由来になっている。雫の落ちる所には壺が置かれ、水が溜まるようになっているものの、水の量は増えもしなければ減りもしないとされている。雫の落ちる場所は策で囲われ立ち入り禁止となっており、ただの湧き水ではなく聖水として扱われていた。



図 4.5.2.2 第 2 窟内の仏像

第 3 窟～第 5 窟

それぞれマハー・アルト・ヴィハーラ（「偉大な新しい寺」の意）、パッツィーマ・ヴィハーラ（「西洋の寺」の意）、デワナ・アルト・ヴィハーラと呼ばれている。

第 3 窟は王キルティ・スリ・ラージャーハーによって 18 世紀後半に造られ、内部には第 2 窟とほぼ同数の仏像が安置されている。第 1 窟内のもののほど大きくはないが、寝仏もある。

また、第 4 窟、第 5 窟はともに比較的新しく作られた石窟であり、第 4 窟にはキャンディ王国末期に作られた比較的新しい座像が多い。特に第 5 窟は 1915 年に修復された最も新しいものである。[19]



図 4.5.2.3 第 4 窟

4.5.3.感じたことや学んだこと

全体的に仏像が多かったが、それ以外の像（王など）も一緒に安置されており、スリランカの歴史と仏教の深い関係を実感した。また、急な坂や階段を登った先に位置しており、参拝するのにかなりの体力が要求される寺院であるにも関わらず、現地の家族連れと見られる人々も見られ、その関係が今でも続いていることがわかった。



図 4.5.2.4 洞窟内に安置されていた王の像（左）と仏像（右）

また、洞窟内を見学している際、スリランカ滞在中ずっとガイドとして付き添ってくださった現地の方が、一部の収蔵品に対して”Stolen by British soldiers(=イギリスの兵士に盗まれた)”と発言していたことも印象に残った。イギリスの博物館の収蔵品については「他国からの盗品ばかり」と冗談のように言われることがよくあり、私もこの手の話は「ネタ」として面白がって消費していた。しかしそれとは対照的に、スリランカの人々にとっては少なくとも笑えるようなことではなく、略奪の歴史として記憶されており、国ごとの認識の違いを実感させられた。

4.6.ワリヤポラ・マワネラ

4.6.1.シナモン農場訪問

9月9日にはバスとトゥクトゥクを使ってシナモン農場を訪問した。そこではシナモンの木からシナモンを年間40kgほど生産していた。シナモンは大きく2種類に分けられて、中国などアジアの広範囲で作られるカシヤシナモンの casia とスリランカで作られるスリランカシナモンの verum である。スリランカシナモンの方が高価であり、一般的にシナモンというところが当てはまる。ここでは、実際に体験した「シナモンスティックの作り方」について紹介する。作り方は以下の通りである。

1. 寿命 100 年と言われるシナモンの木から若枝を取る
2. 加工できる程度に短く切る
3. ピーラーのような機械で一番外側の樹皮を取り除く
4. 木の表面を真鍮の棒で磨き、表面を滑らかにし、硬い木の樹皮をほぐす
5. 樹皮の柔らかい内側の層を一枚に剥いでいく
6. 薄い樹皮を何層にも重ねて丸めながら形を整え、直射日光に当てて皮を乾燥させる

1の枝を切る行為は朝の日が出る前までに行う必要がある。なぜなら太陽が出てくると中の水分が蒸発し出してしまうからである。実際に体験してみて、真鍮の棒で磨く作業は樹皮を綺麗に剥がしやすくするために行う重要な過程であることを学んだ。シナモンからはいだ皮は手で崩せるほど柔らかく、きめ細かく繊細という特徴をもち、乾燥するにつれて棒状にくると丸く固まる。これは主に紅茶に入れられる。ちなみに3の外側の樹皮は肥料として用いられる。

シナモンは1kgあたりおよそ3,000Rsで取引されるため、この農園では年間12万Rs.の稼ぎということになる。この農園が抱えている問題の根幹は専門家が一人しかいないことであろう。スリランカの紅茶産業と比較した時、やはり機械化ができない、パターン作業ではなく力を使う仕事であるように感じた。そう言った点で、技術の伝達にもある程度の人材が必要ということであろう。



図 4.6.1.1 シナモンの木

図 4.6.1.2 シナモンスティック作成過程

図 4.6.1.3 作成したシナモンスティック

4.6.2.現地の方との交流を通して

育った国・地域によって見える景色がかなり異なっているということをシナモン農園に訪れた際に強く感じた。下に示した写真はシナモン農園の写真で、真ん中に写っている職人の方が触れているのがシナモンの木である。それ以外の足元に生えている背の低い植物や、ヤシの木以外の名前を知らない植物について、私は最初「雑草」としか認識していなかった。しかし現地の人によれば、私が雑草だと思っていた草もスリランカではスパイスとして用いることがあるらしく、同じものを見ているようで違ったのだとわかった。



図 4.6.2.1 シナモン農園内の様子

また、シナモン農園で我々を迎えてくださった方々の一人は日本の大学を卒業した経歴を持ち、日本語を流暢に話していた。渡航前はスリランカの人と直接会って話したこともなく、経済面でも人的交流の面でも日本とスリランカの結びつきはそれほど強くないと思っていたが、LNBTIに通っている学生の多さ等も考えると、スリランカにおける日本の存在感が大きいことを実感した。

4.6.3.Lucky Land Spice Garden

シナモン農園を出てキャンディに向かう道中、スパイスガーデン（様々な種類のスパイスが栽培されている場所）に立ち寄った。案内してくださった職員の方は様々な言語を話せる方で、日本語と英語を用いて解説してくださった。園内にあったレモングラス（虫除けとして有効）の汁を塗ってもらったり、allspice というあらゆるスパイスの香りがする植物の香りを嗅がせてもらったりした。



図 4.6.3.1 解説を受けながら園内を回る様子



図 4.6.3.2 allspice

また、途中の東屋のような場所で日本語のパンフレットを頂き、それに沿って実際にスパイスを用いた飲み物やマッサージを体験した。最初に普通の紅茶にシナモンなどのスパイスを加えたスパイスティーを体験したが、これはスリランカでは一般的な飲み物で、現地の学校を訪問した際などにもよく振る舞われてきたものだった。また、キングココナッツオイルを用いてマッサージをすることで薄毛や白髪を予防出来たり、レモンジュースを飲むと体重を減らせたりするということを学んだ。



図 4.6.3.3 マッサージをしてもらっている様子



図 4.6.3.4 ショップ

4.7.キャンディ

4.7.1.キャンディの歴史と街づくり

キャンディはスリランカの中央部に位置し、都市名はカンダという現地で山を意味する言葉から来ていてその名の通り標高の高いところに位置している。アヌラーダプラと同じように仏教的な聖地として有名な都市でその歴史的重要性から町全体が世界遺産に登録されている。

11-13 世紀	シンハラ王国の首都として栄える。仏教寺院や宮殿の建設。
16-17 世紀	ポルトガルとオランダの侵略を受け占領される。
18 世紀	再独立するもイギリスによる侵略を受ける。
1815 年	イギリスによって征服を受けスリランカ全土が植民地となる。
20 世紀	スリランカの独立。



図 4.7.1.1 キャンディ湖

図 4.7.1.2 キャンディの街並み

コロンボとその郊外の都市を除くと 1,2 番目の人口を誇る大都市でありながら、仏歯寺をはじめとした仏教寺院は歴史的遺産として残されている伝統的な街である。中心にある人工湖キャンディ湖の周りにはベンチもあって食事もそこでしたが、ゆったりとした空気が流れていた。自然と発展した都市と歴史的な建物の調和がとれた街並みは日本でいう京都のような雰囲気で執筆者個人的にはスリランカで最も好きな街であった。

4.7.2.JICA 下水道整備事業

9 月 10 日には下水道整備の施設に伺った。ここでもアヌラーダプラの上水道整備の施設のときと同様に説明を受けた後、実際に施設の設備を見学した。



図 4.7.2.1 下水処理に関する説明を受ける

プロジェクトは下水処理場とそれを各家につなぐパイプをしくことを目的として目標地域の 40%が完成している。JICA による支援のおかげで、下水処理場建設をはじめとした水道設備は整ってきたそうである。大使館訪問の際に、スリランカは対外関係において中立を意識するなか日本を頼りにしている部分があるという話を伺った。普段の生活から人々の親しさは感じたが、このような場面でも日本とのつながりを意識することとなった。

下水処理に関して水と同じくらい処理が大変なのが汚泥に関してである。東京都でも産業廃棄物の半分は下水汚泥であるらしく、それだけ処理量は大きくなる。スクリーンの押し込みによる脱水によりとにかく質量を減らすことが重要である。また、ここで印象に残った話は上水道のときと同じようにプロジェクトを進めるうえでの問題点である。下水施設においても JICA から多額の支援があったがその返済は済んでおらずローンが残っている。また、パイプを敷く工事による渋滞、そもそも下水には何が入っているかわからないという不安から住民からの賛成を得るのも難しかったという。しかし実際に施設を見学し下の写真のような浄水された水をみて、これらの問題を解決して下水設備を整える価値があると感じた。

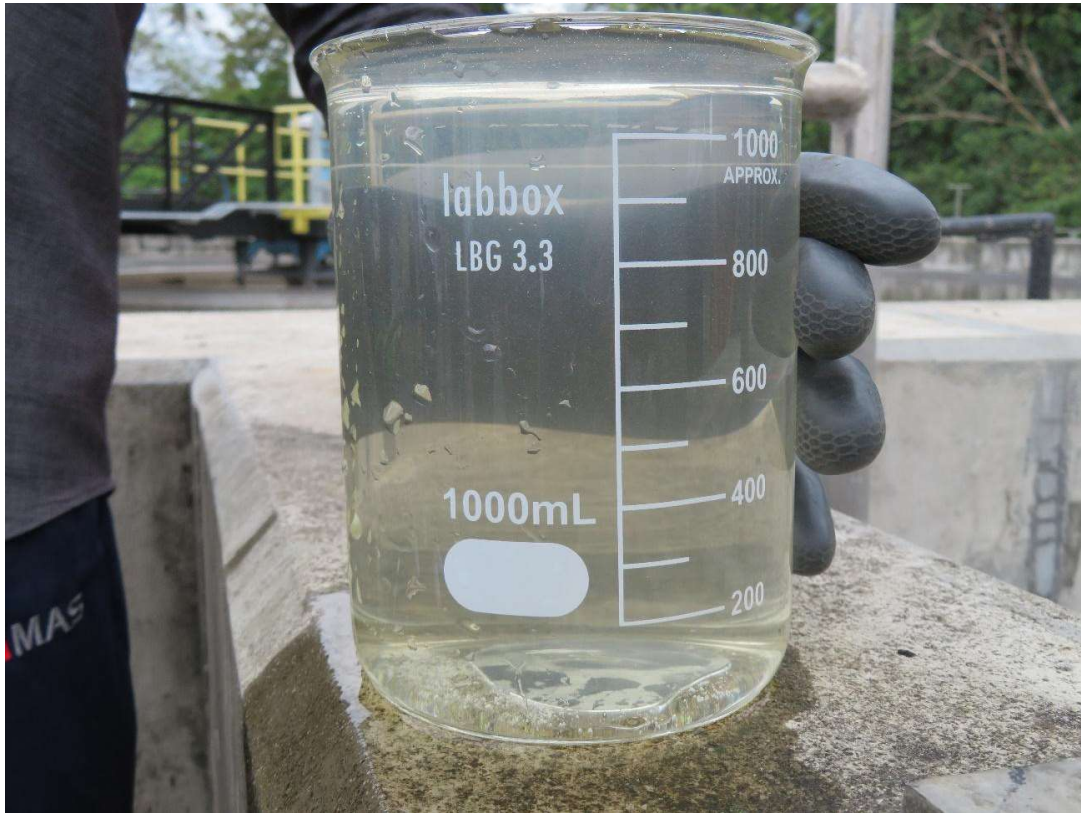


図 4.7.2.2 下水処理後の水

小学校の頃の社会科見学でも下水処理場に行ったことはあったが時を経てもう一度訪れると、設備に関して理解できる幅が広がり、水の需要とその裏腹の整備の問題点などのバックグラウンドも把握できいい経験となった。

4.7.3.紅茶産業の歴史、現状と課題（事前学習及び紅茶農園訪問を通して）

スリランカといえばセイロンティーというほど紅茶が有名である。世界の紅茶生産量ランキング(2018)ではインドに次いで2位の約32万トンである。茶葉は様々な種類があり、有名な B.O.P.F.や B.O.P.や F.P.、O.P.から GOLDEN TIPS など高級なものまである。B.O.P.F.は B.O.P.より細かく、F は小さい粒を表す。茶葉のグレードに関しては、F.O.P.や O.P.などは葉が大きく薄く出るのに対し、F や DUST は葉が細かく濃く出る特徴がある。スリランカではグリーンティーが流行っている。一般的なティーパックに入っている茶葉は DUSTと言われるもので、植物の茎の部分である。普段飲んでいるものが葉から抽出したものではないことが分かり驚いた。

また、ティーテイスターは免許のような資格が必要で、誰でもなれるわけではないから高いお給料だという。彼らの飲み方は口に入れて飲むのではなく、出すらしい。しかし、彼らは舌を大事にしているから、お酒は飲めないと言っていた。

このスリランカの大きな紅茶産業が抱える問題としては深刻な人材不足が挙げられる。それは茶摘み労働者の評判が悪いことや機械化と言っても機械にできないところがあるため必要な人手を減らすことの難しさからくる。

また、最終日には紅茶局を訪問した。紅茶局はスリランカの紅茶産業の管理を行う団体で、ここでは様々な種類の紅茶が販売されていた。そこでみんなお土産を購入した。この紅茶には国内の高品質な紅茶の証明書をして機能するマークがついていた。このライオンはスリランカの国旗のライオンと一致する。ここで販売されている紅茶は紅茶工場で販売されているものより安く販売されていた。いろんな種類があることから観光客をターゲットにしているのだと考えられる。



図 4.7.3.1 紅茶の種類



PURE CEYLON TEA
PACKED IN SRI LANKA



図 4.7.3.2 紅茶証明書

図 4.7.3.3 紅茶局

4.7.4. キャンディ湖と仏歯寺 Temple of the Tooth Telic など

自由時間にキャンディ湖と仏歯寺そしてキャンディセントラルマーケットを訪れた。キャンディ湖では多くの外国人観光客が湖を眺めていた。キャンディセントラルマーケットの1階では主に食料を売っていて、2階ではお土産を売っていた。商品には値段が書いておらず、お店の人に聞かなければいけないという点で少し不親切であるように感じた。仏歯寺（ダラダー・マーリガーワ寺院）はキャンディ湖のほとりにある仏教寺院で、釈迦（仏陀）の犬歯が収められている。敷地内に入ると正面に真っ白な八角形をしたシンハラ建築の建物である八角堂が見られる。続いて仏歯寺の中に入ると高さ2階のお堂がある。また仏歯寺を訪れた際にはプージャという1日3回だけ行われる華やかなお祈りの儀式が行われていた。この時だけは仏歯が収められている部屋の扉が開かれ、仏歯が入った金色の入れ

物を見ることができる。プージャが行われている時間帯は、仏歯を見るためにかなりの多く地元の人が祈っていた。このことからスリランカの人々は仏教を厚く信仰していると感じた。



図 4.7.4.1 仏歯寺外観



図 4.7.4.2 仏歯寺内観

4.8. ゴール

4.8.1. ゴールの歴史

14 世紀~	アラビアの商人たちの東方貿易の地として繁栄
1505	ポルトガル人が到達しゴールの支配が始まり、スリランカの主要港として栄える ロウレンソ・デ・アルメイダの船はゴールにたどり着くも住民から上陸を拒否され武力で入港した 海賊や他の侵略者から身を守るため砦を建設
1500 年代	ポルトガルはスペインと世界二分して支配する海洋帝国として栄えた 日本の種子島に來航し南蛮貿易を行った
1640	オランダによってゴール砦が奪われオランダ人による支配が始まる オランダは砦の建物やレイアウトを大幅に変更して新しい門を追加した オランダ東インド会社(VOC)はゴールからスリランカでの貿易を管理した
1600 年代	オランダの東インド貿易会社によりアジア貿易をオランダが独占していた 東インド貿易会社は当時世界最大の営利会社となった
1796	イギリスによってゴールの所有権が奪われイギリス人による支配が始まる 要塞を行政の中心として使用し、新しく裁判所を建設し城壁を拡張した
1700 年代	イギリスが大ブリテン帝国として繁栄した時期 大西洋における三角貿易で利益を上げ、植民地帝国となった時期
1988	要塞に囲まれた旧市街がユネスコ世界文化遺産に登録される
2004	スマトラ島沖地震による大津波によって砦とその周辺に甚大な被害が出る 津波の後、被害を修復するための復旧作業が行われ、現在は完全に修復されている

実際にゴールを訪れると、これらの歴史的背景を感じさせるような灯台、教会等の様々な建物があり、歴史を感じる街だった。

4.8.2. STEAM プレゼンテーションと交流

9月12日にはゴールにある高校を訪れて日本のSTEAM教育に次いでプレゼンをした。プレゼンの目的は日本の教育に興味を持ってもらうことであつた。これのための下調べのときに東京工業大学はSTEAM教育を積極的に取り入れていることに気がついた。そこか

らプレゼンをするときはいかに楽しい教育を受けてきたかということが伝わるように意識した。実際、現地の高校生の中には英語が話せない子もいて、もう少しわかりやすい英語にしてあげたら親切だったなと感じた。そのプレゼンの後、高校生と交流をした。その中に話しかけてくれる男の子がいた。その子は”Do you hate America?”と聞いてきた。そのとき、なんでいきなりこのように聞かれたのかわからず私が困った顔を見ると、アメリカは日本の広島と長崎に原爆を落としたからと説明してくれた。それを聞いたとき、日本に関心を持ってくれているという嬉しさと歴史から学んだからこそ生じてしまう思い込みがあるのだと感じた。例えばどこかの国が植民地支配されていたとすると支配国のことを今も植民地とされていた国はよく思っていないという思い込みをしてしまう。世界史の授業で事実の通りに自分の中で思い込みが生じていることに気がついた。その子には歴史の事実は許されないことだが、今は日本にとって不可欠な存在だと思うと伝えた。



図 4.8.2.1 ゴールの高校訪問

図 48.2.2 ゴールの高校での交流

4.8.3. ゴール旅行(訪れた場所)

ゴール旅行で宿泊したホテルはスリランカでもトップクラスのホテルで、スリランカ出身の有名な建築家、ジェフリー・バワの設計したものである。海のすぐそばに建てられており、美しい外装とビーチの調和が素晴らしいホテルであった。Taka の誕生日会をした後、トゥクトゥクに乗ってゴールで有名という国営の土産屋 LAKSALA へ行き、各自土産を調達した。



図 4.8.3.1 ホテル「ジェットウィング・ライトハウス」



図 4.8.3.2 土産屋の Shintaro

2 日目は、ゴール市街の散策をした。ゴールはヨーロッパ人が建築した城塞都市であり、ヨーロッパ建築と南アジア地域の伝統が混在している。城壁や砲台、灯台が設置されており、その歴史的な旧市街地区は「ゴールの旧市街と要塞」の名で世界文化遺産に登録されている。キリスト教の教会があり、スリランカ各地で見られた仏教建築は見られなかった。町全体について、欧風というイメージが強かった。その日は非常に暑く、みな汗だくになりながらゴールを散策していた。



図 4.8.3.3 キリスト教の教会



図 4.8.3.4 かつて病院として使われていた建物



図 4.8.3.5 砲台と城壁



図 4.8.3.6 灯台

5.スリランカの食、教育、スポーツ、建築

5.1.スリランカの食文化

この章ではスリランカの食文化について扱う。

スリランカ訪問前はスリランカ人は3食カレーと聞いていたが、実際行くとそうではなかった。図5.1.1や図5.1.2のようなビュッフェにはカレーが必ずあり、どの店にもカレーメニューにあるだけで、ピザなども食べていた。



図 5.1.1 ビュッフェの様子

また、全体を通して言えることは量が多いことである。ハーフサイズを二人で分けるのが最適と言えるほどであった。しかし、価格は日本よりも安く、味は素材の味というよりは調味料の味がメインに感じた。LNBTIの学生と一緒に夕食で食べた際、とても味が薄めで食べやすく美味しく感じたが、スリランカの友達は「ここはあんまり美味しくなかったね」と言っていて、味覚が異なるのだなと感じた。特に私は味付けの薄い料理が好きなので、特に差が出たのかもしれない。

次に、具体的なスリランカの伝統的な食べ物をいくつか紹介する。

カレー

スリランカのカレーは日本と違い、水分の少ない具の多いカレーであるため、手づかみでカレーを食べることができる。カレーにはたくさんの種類があり、スパイスの効いたものが多く、多くの店舗で見かけたカレーの種類はチキンカレー、フィッシュカレー、ダルカレーなどがある。私のおすすめは辛めで日本であまり見かけないフィッシュカレーだ。



図 5.1.3 スリランカカレー

アッパー

これは米粉とココナッツミルクを発酵させて作った器型のクレープで、端はパリパリ、中はフカフカ。別名はホッパー。これは小さな丸い鍋で調理するためこの形になる。アッパー自体は辛くないので、辛い料理と一緒に食べることが多く、真ん中に卵を落として焼いたエッグアッパーも人気である。



図 5.1.4 アッパー

コットゥ

スリランカでは新しい料理であり、ゴードンバ・ロティを細かく刻み、野菜、肉、卵と一緒に炒めてつくる。結構重めですぐおなかいっぱいになり図 5.1.5 はハーフサイズで注文したが、半分も食べきれなかった。



図 5.1.5 コットゥ

ロティ

スリランカでよく食べられるパンの一種。見た目はナンと似ているが、ナンより少し固く、歯応えがしっかりしていて、腹持ちが良い。形は丸方が多く、サイズは一口よりちょっと大きめなものからお皿いっぱい大きさまで様々であった。たいていの場合、カレーを付けて食べる。



図 5.1.6 ロティ

ソーセージ

ビュッフェに行くと必ずビーフ、チキン、ポークの 3 種類のうち 2 種類以上のソーセージがあった。これは宗教によって食べられない人がいることを考慮していると考えられる。



図 5.1.7 ソーセージ

バナナ

スリランカにはさまざまな種類のバナナがある。これはスーパーマーケットにあるバナナの写真である。日本で流通しているバナナに近い味から甘くないバナナまである。小さなバナナが主流の印象であった。



図 5.1.8 スーパーで売られているバナナ



図 5.1.9 路上の食品売り場の様子

フルーツサラダ

これはスリランカで有名なデザートであり、果物にアイスが乗っている。日本でも流行りそう。



図 5.1.10 フルーツサラダ

パンケーキ

日本にもあるパンケーキの生地をココナッツのミルクで溶いて巻いたもの。これは日本のパンケーキとは異なる。歓迎会などで目にする機会が多かった印象である。とても甘い。



図 5.1.11 パンケーキ

カード

水牛のヨーグルト。なめらかで濃厚で、加糖のプレーンヨーグルトより甘さが控えめでとても気に入った。ハニーをつけて食べるととても美味しい。

ワッタラッパン

ココナッツの蜜を卵で溶いて型に入れて蒸したプリンのようなデザート。黒糖プリンに似た甘さであった。

ハラパ

クラッカ粉にココナッツなどを混ぜてペーストし、キャンダコラという木の葉で包んで蒸したお菓子。日本の桜餅や柏餅に似ている。スリランカのお菓子の中では比較的甘くない方なので気に入った。



図 5.1.12 カード(右)・ワッタラッパン(左上)・ハラパ(下)

キリバット

米から作られるスリランカの伝統的料理である。ほんのり甘い冷たいおにぎりのようであった。



図 5.1.13 キリバット

パニワラル

小麦粉の生地をプレッツェルまたは円型に揚げ、砂糖シロップに浸したものである。味は、甘く日本でいうかりんとうに近い。



図 5.1.14 パニワラル

コキス

米粉とココナッツミルクなどを混ぜて油で揚げたデザートである。とてもサクサクしていて甘さは控えめ。クラッカーに近い。



図 5.1.15 コキス

次に有名なドリンクをあげる。

ジンジャービール

ビールというが、ソフトドリンクである。ジンジャエールのジンジャー強めと言ったところであろうか。クセがあるが、宗教上お酒の飲めない方や未成年に人気のドリンクである。

ライオンビール

スリランカの代表的なブランドのビール。製造元のライオンブルワリーは 1881 年創業で、アジアで最も歴史が長いビール生産元である。



図 5.1.16 ジンジャービール



図 5.1.17 ライオンビール

ほかにも紹介していない有名な食べ物がたくさんある。ぜひスリランカに行ったら食べてみてほしい。



図 5.1.18 食事風景

5.2.スリランカの教育(高校での活動を通して)、日本との違い

スリランカの高校を訪れる機会は、アヌラーダプラとゴールで 2 回あった。前者は共学で後者は男子校だった。どちらの学校も人数がすごく多く、休み時間にはグラウンドが生徒でいっぱいだった。授業時間としては朝から 13 時までと、日本と比べると短い時間であった。またスリランカでは高校に入学する際 O レベル試験というものを受けなければな

らず、この試験がスリランカの学生にとって重要な試験であることが話していて分かった。試験の科目は日本とほぼ同じで、数学、英語、理科、社会であった。スリランカの教育制度は高校卒業まで5・4・2・2であるのに対し、日本は6・3・3であり少し異なっていた。また課外活動については全ての人が部活に入っているわけではなく、限られた一部の生徒だけが学校のクラブチームに入っているようだった。そしてアルバイトは高校生までは全面的に禁止のようだった。



図 5.2.1 アヌラーダプラ高校



図 5.2.2 ゴール高校

5.3.スリランカのスポーツ(クリケット)

スリランカで人気のスポーツと言えばやはりクリケットである。テレビをつければいつもクリケットの試合が放送されているし、ゴールの学校に行った際に学生に好きなスポーツを聞いたところ、半数以上がクリケットと答えた。

投手はテニスボール大の球を打者側に立っている3本の棒に向けて投げる。打者はその棒に球を当てられないように、バットで球を打つ。打者が打った球がホームに戻ってくる前に、打者とそのペアの走者が走ってお互いの場所を入れ替えるたびに点が入るというルールである。公式の試合では数日かけて1試合を行う。

我々はアヌラーダプラの学校で、1時間ほどクリケットを体験した。野球と似ているが投げるとき・打つときの勝手はかなり異なるものであった。野球のようにバットを横に振ると打つのがとても難しく、縦に振るのが良いと現地の学生に教えてもらった。また、クリケットのルールで投手は投げるときに肘を曲げてはならない。これも野球とは勝手が違い、難しかった。全員が投手と打者を体験した。プレー外では、東工大生が現地の学生に応援の言葉を教えており、「Taka、打てー!」といった声援が送られた。みな大いに楽しんだようであった。



図 5.3.1 アヌラーダプラでのクリケット体験の様子(打者)

図 5.3.2 アヌラーダプラでのクリケット体験の様子(投手)

5.4.スリランカの建築家バワについて



図 5.4.1 ヘリタンス・カンダラマ[20]

①ジェフリー・バワについて[21]

スリランカを代表する建築家であり、数々のリゾートホテル建築を手がけた。バワの建築の特徴として自然に建築を溶け込ませて一体感を作っている点や屋内と屋外がつながっている解放感があげられる。

代表作品としてヘリタンス・カンダラマ(図 5.4.1)があり、ホテル全体が緑でおおわれている点やホテルの様々な場所からカンダラマ湖を見ることができ、各場所、各部屋ごとに違った景色を楽しむ点が特徴である。

②ライトハウスについて



図 5.4.2 ライトハウスの外観 入口



図 5.4.3 ライトハウスの外観 海側から

今回の留学でバワの建築であるライトハウスに宿泊することができた。ホテルの入り口(図 5.4.4)は薄暗かったが、少し進むと手すりに彫刻があるらせん階段(図 5.4.5)が待ち構えており、天井から降り注ぐ光により視線が自然と上に行き、階段を自然と登り始める。階段を上ると 2 階に到着するが、そこから海とベンチが見える(図 5.4.6)。

ベンチは半屋外の海沿いにあり、インド洋が一望できた。ベンチのある場所は屋根で日差しを遮りつつも風を入れることで快適な空間を形成していたのが特徴的であった。

ここまでを振り返ると、入り口では暗い雰囲気を出し、明るさで上へ導き、階段の先に海があるという短いが、ストーリー性があるように感じた。



図 5.4.4 ライトハウス エントランスホール



図 5.4.5 らせん階段



図 5.4.6 半屋外においてあるベンチ

ベンチから部屋に移動していくと横に小さな草原(図 5.4.7)があり、通路の途中の階段には自然の岩がそのまま置かれており岩に直接柱が立っているところも見られた(図 5.4.8)。このように、いったん建物の中に入れつつも部屋までは外を歩くことができるので、建築の中にいつも自然を感じられたので印象に残った。また、岩やもともとある地形を活用している点も印象に残った。(図 5.4.9)



図 5.4.7 横に見える小さな草原

図 5.4.8 そのまま置かれている岩

図 5.4.9 地形をそのまま使っていると考えられる

部屋に到着すると窓からプールと海を見ることができた。

この時、窓と壁の接続に注目してみると、壁の厚さに対して窓の厚さは薄いので、段差が生じるが、そこを直角につなげるのではなく、斜めにつながれていた。(図 5.4.10)この仕組みにより、視線が窓に誘導され、そのままドアを開けてベランダに出たくなる効果があると感じた。(図 5.4.11)



図 5.4.10 壁と窓が斜めに接続されている

図 5.4.11 窓とドアを自然と開けたくなるづくり

このように、ライトハウスはバワの特徴である自然を建築に溶け込ませている点や屋内と屋外がつながっている点を感じることができた。

6.スリランカ個人感想

6.1.情報理工学院/数理・計算科学系/数理・計算科学コース M2

研修で得たこと、感じたこと

スリランカの学生は日本等の外国にすぐ行きたがっていると感じた。このように感じた理由は L N B T I の学生や現地の高校生が口をそろえて日本への憧れを唱えていたことに加えて、コロンボでの大学展示会見学でどの大学も海外へ就職できることを押していたからだ。

実際に学生に日本に行きたい理由を聞いてみたところ、表向きの理由として富士山や京都、侍等の日本の文化を学びたいと答えた。しかし実際はスリランカの給料が低くより良い暮らしをしたいからなのではないかと考えた。スリランカの現状を知るべく、コロンボドックヤードの社長に給料事情を聞いてみた。コロンボドックヤードはスリランカでは超一流企業であるが、給料は日本の3分の1程度らしい。またスリランカの物価は日本の半分であると思った。ここで物価と給料の関係を見ると、日本よりも生活が苦しいことがわかる。このような背景から、スリランカの学生はなんとしても努力して這い上がってやるという心意気を凄く持っていると感じた。

将来に向けての展望

この留学経験を経て、自分は以下の2点を将来的に伸ばすべき能力だと考えた。1点目は英語の話す聞く能力だ。就職活動でOB訪問をした際、色んな人から英語はできたらいいよと言われた。しかしなんとなくそう思うだけで実感がわからなかった。今回の留学を経て、外国人と話す際にはある程度のパッションとリアクションがあればなんとかなると思ったが、相手の英語を全て理解できたらより気持ち良く会話を楽しめると思った。2週間の英語での生活を経て身にしみて英語力の必要性を感じたので、まずは毎日英語をコツコツ聞くことで英語力を向上させたい。2点目は辛い時でも努力する気持ちだ。実際日本に住んでいてテロの危険もなく美味しいご飯を食べられて、日本は改めて凄く良い国だと感じた。しかし良い国であるからこそ、もっと頑張ろうというハングリー精神がスリランカと比べて足りないと感じた。（世界でトップレベルに恵まれているのでハングリー精神が足りないのは仕方がないと思う。）そこで自分はスリランカの学生のように、絶対に成長して世の中を変える人になるという強いハングリー精神を持って今後の人生を彩って行きたい。



図 6.1.1 ゴール高校懇談会

図 6.1.2 アヌラーダプラ高校

6.2. 物質理工学院/材料系 B4

研修で得たこと・感じたこと

スリランカで最も驚いたことは、現地の人々の底抜けなフレンドリーさである。バスガイドさんや運転手さん、現地の学生をはじめ、エレベーターでたまたま乗り合わせた人や店員さんなど、多くの人が私たちに話しかけてきてくれた。アヌラーダプラや LNBTI の学生たちとはたくさん連絡先を交換したし、SNS では若干当惑してしまう量のメッセージが寄せられた。また一緒に写真を撮る機会も非常に多く、セルフィーを一緒に撮ろうと誘われた回数は数えきれないほどであった。日本人はシャイだと言われるが、スリランカ人のこういった姿勢は見習いたいと思った。こうしたスリランカ人の友好的な態度のおかげで、現地の人に話しかける積極性を持つことができたと感じる。仏教徒が多いということもあってか、現地の人々はみな親切で、気持ち良く研修を終えることができた。

また、途上国としての側面も非常に印象的であった。物価の安さ、物乞い、水質、治安、都心の建物の高さなど、先進国である日本との違いをひしひしと感じた。特に、ホテルのシャワーから下水のような水が出てきたときは衝撃的だった。コロンボは都心であるが、東京のように高層ビルが立ち並ぶというわけではなく、ぽつぽつと高い建物が建っているといった感じであった。また、JICA や大使館での話を聞いて、財政破綻の影響を身をもって感じることもできた。インフラ整備に手が回らなかったり、ガソリンの供給が途絶えたりと、事例を知ることによって言葉でしか知らないことを実体として理解できた。

将来に向けての展望

スリランカにいる間、特に課題として意識したのはやはり英語力である。時間が経つにつれてある程度耳が慣れ聞き取れるようになったが、それでも完璧ではなかった。現地に滞在中、ちゃんと聞き取れていれば、うまく話せていればもっと楽しく会話できたのにと

思う機会が多々あった。これまでは機械的に英語の学習をするだけであったが、英語力を身に着けることの必要性を実感し、モチベーションとなった。

これとは裏腹に、上手く話したり聞き取れなかったりしても、ある程度のコミュニケーションができるということもわかった。これは意外なことであったが、自信にもつながった。英語のスキルとは別に、相手に伝えようと、あるいは相手を理解しようと力を尽くすことが大切であると知ることができたのは自分にとって大きかったと思う。超短期派遣を終えて、日本で留学生に英語で話しかけることができるようになっていた時には自身の成長を実感した。

スリランカでの生活を通して、英語コミュニケーションにおいて大切なことを学ぶことができた。これは必ず将来的に生きてくると、私は確信している。



図 6.2.1 LNBTI 学生との写真

図 6.2.2 コロンボ市街

6.3. 環境・社会理工学院/建築学系 B4

①発展途上国のイメージや印象について感じたこと

私は今回の留学が初めての発展途上国であり、留学前は発展途上国について、賑やかであるという良いイメージは持ちつつも、渋滞が多い、低層な建物が多い、犯罪が多いなど、ネガティブなイメージを多く持っていた。しかし、これらの印象が本当に正しいかわからなかったため、実際に発展途上国に行くことで正しいイメージを持ちたいと思い、今回の留学に参加した。

実際にスリランカに行き、多くの人が話しており、街はクラクションが鳴りっぱなし、自分も街の人や学生さんから話しかけられるなど賑やかな印象を持ち、コロンボの渋滞、ロードサイドの低層な建物(図 6.3.1)、公園で知らない人に「I have no money.」と話しかけられ一目散に逃げた経験から、犯罪のリスクの高さを実感するなど、もともと持っていた印象と近いものを感じた。

しかし、現地で自分の持っていたイメージと違った点も多くあった。それは特にコロomboとキャンディで感じることができた。

まず、コロomboはすでに完成している高層ビルが多くあり、また、建設中の高層ビルも多かった。そして日本で見られるショッピングセンターもあり、そこだけ切り取ると日本と遜色ないほど発展していて驚いた(図 6.3.2)。一方でビルの横に低層な建物もあるなど、まさに発展途上という印象を持ち、今後町がどのように発展していくか興味がわいた。



図 6.3.1 自分が想像していたスリランカの街並み



図 6.3.2 コロomboの高層ビル群

また、キャンディでは古いものや伝統を守っている様子が印象に残った。

キャンディは仏歯寺や近くのホテルなど、伝統的な建築の近くにショッピングモールがあった。もし外観が新しいデザインであると街の印象が悪くなる可能性がある、ショッピングモールの外観は街並みに合わせて古めのものになっており、内観が新しいものでも外観を配慮し、街の印象を壊さない開発をしていることが印象に残った。(図 6.3.4)



図 6.3.3 ヨーロッパを感じさせるキャンディの町



図 6.3.4 左奥がショッピングモール

また、JICA で開発と伝統の対立について質問をした際の返答で、スリランカの人々は伝統や文化を大切にしているという言葉が印象に残った。

JICA では開発をする際に道路の建設予定地に大きなお寺がある場合にお寺を移転するなどの対策をされているお話も伺うことができ、日本からの支援の際にスリランカのことを考えて支援をしていることがわかった。

このようなことを知ることができ、発展途上国に対するイメージは、「自分が思っているよりも発展しており、また、日本と同じくらいに伝統を重視している」という点で新たな視点を得ることができた。

発展途上国の印象が変わったことに加え、今回の留学でスリランカの料理や環境にも対応することができたので、発展途上国に対する先入観が少なくなり、自信がでたことで、将来発展途上国に行くことも非現実的ではないと思えるようになった。

②将来への展望

私はスリランカへ行き、多くの学生さんとコミュニケーションを取ったことで、学生さんたちが自分たちのことを、また、日本のことを知りたいと強く思っていることを感じることができ、意欲の高さに驚いた。

また、LNBTI の学生さんが試験に向けて日々勉強されていることを会話や SNS を通じて知ることができた。

一方で自分はどうかということ、高校生や大学の初めは意欲を持っていたものの、次第に薄れていき、最近では日々の研究や授業でやる気が出ないことや、面倒くさいと感じるなど、意欲が低くなっていると感じ、自分も現地の学生さんのように意識を高く持つ必要があると気づかされた。

クマーラ先生がおっしゃっていたように自分にもまだ伸びしろがあると信じ、スリランカの学生さんに負けないように、まずは卒論や卒業制作に向けて意欲的に取り組んでいきたいと思う。

そして大学院に進んでも、社会に出ても、スリランカで学んだことを忘れずに意欲的に学び続けていきたいと感じた。



図 6.3.5 LNBTI 学生との写真

6.4. 工学院/システム制御系 B3

研修で得たこと、感じたこと

普段の生活で感じたことは熱帯地域であるが意外と暑くなかったということ。天気が曇りの日が多かったのもあるが晴れの日でもあまりしんどさを感じることはなく、日本のジメジメした夏の日より過ごしやすかった。

他に驚いたのは道路や交通に関してであった。どの乗用車もトゥクトゥクも日本ほど車線の分かりやすい道路をかき分けるようにして追い抜き、追い抜かされる。よく事故が起きないものだと思いますが、運転技術に長けていると感じた。ちなみに現地の学生に聞いたところ物価の安さを差し引いても日本ほど免許取得にお金はかからないらしく羨ましく思った。また海岸沿いを走る電車がドアを開けたままであったのが衝撃的であった。

コミュニケーションについて今回の研修で得たことは大きかった。もともと英会話には自信がなかったが、相手の話していることが聞き取れなかったり、自分の言いたいことを伝えきれなかったりしたことは何度かあった。しかしそれ以上に表情やジェスチャーだけでもお互いに表現することはできるのだと実感し、特に笑顔とピースサインの力は偉大であった。それでも英会話の能力の重要性はしみじみと感じたので今後伸ばしていきたい。

将来にむけての展望

LNBTI の学生との交流を経て、彼らが将来に対する目標を見据え、その実現に向け努力し続けていることを実感した。ホテルで同部屋となった学生は英語と学んだ流暢な日本語で、エンジニアとして日本ではたらく夢と動機を語った。エンジニア技術や語学の勉強を何年も続け、今年の10月には日本に来る予定もあるらしい。自分と同世代の学生が明確な目標に向かって着々と近づいているのだと分かり刺激的だった。対して今の自分はどうか。将来やりたい研究や職業も決まらぬままバイトやサークル、授業といった流れるままの生活を歩んでいる。プログラムに応募したのはそんな日常に何か変化を起こしたかったからであった。今回の研修で十分なほどの貴重な経験と刺激を得ることができた。スリランカの学生たちを見習い、これをきっかけに自分が本当にやりたいことを見出して、貪欲な努力を重ねていきたい。



図 6.4.1 ドアが開いたまま走る鉄道



図 6.4.2 LNBTI 学生との交流の様子

6.5. 工学院/電気電子系 B3

研修で得たこと、感じたこと

私がスリランカに行ってまず驚いたのは、現地の人々がとてもフレンドリーで気軽に連絡先を交換することだった。ホテルにチェックインした際、部屋に荷物を運んでくれたボーイさんが「自分の娘は今日日本で働いているんだ」と言って娘さんの写真や名刺を見せてくれたことがあった。また、アヌラーダプラとゴールで現地の学校を訪問した際、たくさんの学生が東工大生の周りに集まってきて、WhatsApp や Instagram のアカウントを交換したり、自分の連絡先を書いた手作りのカードを渡してくれたりした。私も自分の学校に外部から講演や国際交流を目的に人が訪れることはあったが、芸能人のように周りを取り囲んだり、手を振ったり、連絡先を交換したりすることはなかった。そのため、最初は熱心に連絡先を知ろうとする態度を不審に感じてしまっていた。しかし LNBTI の学生にこの話をすると、「自分たちは旅行先でよく現地の人と連絡先を交換する」「そうしたら現地の情報を手に入れられるし、また次に来た時に案内してもらったりできるから」と言われ、ただ連絡先を教えるハードルの高さが違うだけなのだと理解できた。これからも連絡を取り合い、また会える日を楽しみに待ちたいと思う。



図 6.5.1 連絡先カードの一部

図 6.5.2 ゴールの学生たちと

将来への展望

スリランカではシンハラ語とタミル語が公用語とされているが、今回現地の人との交流では英語を主に使用した。スリランカの人々は英語を流暢に話せることが多いイメージがあり、自分も英語は得意な方だと思っていたので、渡航前はコミュニケーションにはあまり苦勞しなさそうだと思っていた。しかし実際話してみると、確かにお互い流暢に話せるものの、母語の訛りが強く頻繁に聞き返し合うことになった。紅茶工場に見学に行った際は、説明してくださっている従業員の方の「茶葉 (tea leaves)」が「チリ (chili)」に聞こえてしまい、しばらく意味を考えることになった。LNBTI が学生の日本での就職を目指しているように、仮に自分が海外に行かず日本に留まり続けたとしても、これから先様々な国にルーツを持つ人々と一緒に働くことになる。その時共通語として使われる言語は圧倒的に英語であることが多いと思われるが、自分も含め皆がネイティブのように発音するとも限らない。英語力向上のためにはネイティブと話すことも大事だが、多様な人と関わり合い、色々な英語に耳を慣らす練習も積んでいきたい。

6.6. 情報理工学院/情報工学系 B2

研修で得たこと、感じたこと

私はこのスリランカへの超短期派遣を通して多くのことを学んだ。

まず、インフラ整備の重要性である。今回途上国にはじめて訪問したので、わかったことであるが、日本のインフラ設備を当たり前と思ってはいけない。蛇口を捻ったら水が出ること、水道水を飲んでも安全であることに対して当然と思うのではなく、感謝の気持ち

ちを忘れてはいけなと感じた。

また、現地の学生と接して、スリランカ人はどんなに環境が悪くても勉強しようという意欲があると感じ、そこにとっても刺激を受けた。日本人は大学に行くということだけでも恵まれていて、授業を受けることができるのに対し、スリランカでは教育を受けたくても受けられない育ちの人もいる。そういったことを理解することによって、大学の授業を適当に受けるのではなく、きちんと身につけて行こうと思った。LNBTI の学生はバイトはせず、学校からお金の補助が出るから、勉強に集中できると言っていた。それに対し私はバイトをしてサークル活動も楽しみながら勉強をしている。だからこそ効率よく勉強していきたいと思った。

スリランカは美しい自然環境や野生生物が多く存在し、虫も多かった。その環境下で 2 週間ほど生活しただけだが、小さな虫の命も大切に感じるようになった。今まではハエが自分の周辺にやってきたら不快な気持ちになっていたが、今では怖いというよりは頑張っで生きているんだなと感じるようになった。小さな生命にも配慮して共存していきたい。

将来に向けての展望

スリランカは多様な文化と宗教が共存する国であり、異なる宗教の信者と交流する機会が多くあった。そういった時に、やはり共通言語の英語の重要性を実感した。異なるバックグラウンドや信念を持つ人々と共に生活し、他人の文化を尊重するためには、言語が使えないと始まらない。異なる価値観や習慣を尊重し、受け入れることは、異文化間のコミュニケーションにおいて不可欠であり、そのための英語の勉強は継続していくべきことであると感じた。一緒にお泊まりをした現地の学生は日本語が上手に話せていて、その子は今までずっと日本人と対面で会ったことはなかったと言っていた。それを聞いた時に、英語圏の友達がいる私は英語を勉強するのにより恵まれた環境にいることを実感し、このチャンスをきちんと行動に移して勉強していこうと思った。

また、スリランカ人の学生はプレゼン能力が高いと感じた。前で話す時に全員が堂々としていて、何かのトーク番組を見ているかのようであった。そういった話し方は人を惹きつけることができるため、自分が欲しい能力である。今後このプレゼン能力に磨きをかけたい。



図 6.6.1 LNBTI 学生との交流

6.7. 理学院 B1

研修で得たこと、感じたこと

この国に着いてまず初めに印象に残ったことは、仏教の浸透具合と、その派手さだった。特にコロンボでは仏像やそれに類するものを見つけられない方が難しいほどに、至るところからネオンで存在感を放っていた。日本とスリランカがともに島国ということも相まってか、同じ仏教でも大きな違いを感じ、画一的だと思っていた仏教にも特色があることを知って驚いた。また、スリランカの公用語はシンハラ語とタミル語であるが、どの表記にも必ずと言っていいほど英語が併記されており、英語が表記されていないものを見つける方が難しいというほどだった。この点において、日本よりはるかに進んでおり、見習うべきだと思った。



図 6.7.1 派手に輝くロータス・タワー

このプログラムでは LNBTI の学生や先生と過ごす機会が多かったが、そのなかで分かったことがある。この国の若者は海外志向がとても強い。それは日本も含めた諸外国に憧れているという部分もあるだろうが、国内にとどまることが嫌になっているという面も少なからずあると考えられる。昨今の経済破綻がその原因の一つだと考えられ、またそれに伴う大規模なデモからその片鱗が垣間見える。それもあってか、現地の学生たちは我々日本人に対してとても友好的かつ積極的で、幾度となく話しかけられた。内向的な性格の自分はその歓迎ぶりにとても助けられ、人に話しかけるきっかけを少し掴めるようになることができた。



図 6.7.2 高校での歓迎会の様子

将来にむけての展望

先述したように、スリランカの公用語は英語ではない。もちろん日本語でもないので、我々が現地の人と会話をする際は必然的に英語を用いることになる。母国語が英語でない人と英語での意思疎通を図るというのは初めての経験であり、かなりの困難を伴うものだった。これまで、自分は英語を話せるほうだと思っていたので、互いに中学生レベルの英単語しか用いていないのに満足に会話できないというのはかなり衝撃的な体験だった。最後には発音の癖をつかんで、かなり意思疎通ができるようになったので、この経験を将来必ず訪れるであろう母国語が英語でない人たちとの会話に役立てていきたい。



図 6.7.3 シンハラ語、タミル語、英語で表記された看板

引用・参考文献

- [1]<http://www.i-wanna-travel.com/r3-sri-lanka00.html>
- [2]<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/srilanka/data.html>
- [3]<https://urahyoji.com/crops-coconut/>
- [4][元鈴鹿大学長補佐のクマーラ氏 スリランカで学長就任 日本向け I T 人材育成 三重 - 伊勢新聞 \(isenp.co.jp\)](#)
- [5][LNBTI - Lanka Nippon Biztech Institute](#)
- [6]<https://www.jica.go.jp/oda/project/SL-P41/index.html>
- [7]<https://www.jica.go.jp/Resource/publication/mundi/1511/ku57pq00001qj10v-att/03.pdf>
- [8]<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/06/312337b72ae8ccff.html>
- [9]https://www3.nhk.or.jp/news/special/news_seminar/jiji/jiji22/
- [10]<https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/4306.html>
- [11]https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjwrs/37/0/37_KJ00009904607/_pdf/-char/ja
- [12][古代都市シーギリヤ|悲し過ぎる歴史を持つシーギリヤロック。-and 世界一周-カップル 2 人旅ってどうなん?!\(and-sekaiissyu.com\)](#)
- [13][これを見ればガイド不要！世界遺産シーギリヤロック完全ガイド！知らなきゃ損する見所からインスタ映え撮影ポイントまで徹底解説！ | Sri Lanka Taxi Service\(日本語 OK\)ご利用実績 No.1 のタクシーチャーターにお任せください。](#)
- [14][シーギリヤロックの歴史【建築技術が凄すぎる】【古代遺跡】【謎】【ミステリー】【スリランカ】 - \(deliverylife13.com\)](#)
- [15][特集『古代都市シーギリヤ』 | TBS テレビ：世界遺産](#)
- [16][巨岩の上に建てられた謎の古代遺跡シーギリヤ。地質的にも興味深い場所 | GRANITE | 地学博士のサイエンス教室 グラニット \(watanabekats.com\)](#)
- [17][スリランカ旅行まるわかりガイド](#)
https://tourism-srilanka.net/destinations_cat/cultural-triangle/
- [18][ダンブッラの黄金寺院、阪急交通社](#)
<https://www.hankyu-travel.com/heritage/srilanka/dambulla.php>
- [19][スリランカの世界遺産！聖なる不思議な水が滴り落ちる「ダンブッラの石窟寺院」](#)
<https://ashitane.t8s.jp/culture/2349/>
- [20][地球の歩き方編集室\(2021\)『D30 地球の歩き方 スリランカ 2020~2021 \(地球の歩き方 D アジア\)』学研プラス; 改訂第 16 版.](#)
- [21][時間の経過と共に緑が生い茂り、自然に帰化するホテル「ヘリタンス・カンダラマ」\(tabit.jp\)](#)
- [22][ジェフリー・バワ - Wikipedia](#)

謝辞

今回のスリランカ留学において関わっていただいた、すべての皆様に感謝申し上げます。

そして、企画から現地の生活、帰国後まで常にサポートしていただいた、アーナンダ・クマラー先生、LNBTI の先生方、竹村先生、菊地さん、村上先生、グローバル理工人育成推進室の皆様に感謝申し上げます。また、現地で交流していただいた、在スリランカ日本大使館の水越大使、井上様、JETRO コロンボ事務所所長の大井様、JICA の山田様、井出様、Eng.Sudath Rathnayake 様をはじめ、見学時にご対応いただいた皆様、コロンボドックヤードの田中会長、野崎様、すべての LNBTI の学生さんとゴールで共に過ごした、Anouk さん、Sandewna さん、Dinithi さん、Akindu さん、Enuk さん、Sasindu さん、Anushka さん、訪問先の高校の皆様、シナモン農園の Manel さんはじめ、農園の皆様、ガイドのカーネルさん、ドライバーの Priyantha さんに感謝申し上げます。そして、帰国後に訪問の機会を設けていただいた駐日スリランカ大使館のロドニ・ペレーラ大使、カピラ・クマラ様に感謝申し上げます。

皆様のご協力なくしてはスリランカ留学で多くのことを学ぶことはかなわなかったものと思います。今後、今回のスリランカ留学で学んだことを活かし、意欲的に学び、行動していきたいと思います。

ACKNOWLEDGEMENTS

We would like to express our gratitude to everyone who was involved with studying abroad in Sri Lanka. We are thankful for the support from the planning to life on-site and even after returning provided by Professor Ananda Kumara, the LNBTI teachers, Professor Takemura, Ms. Kikuchi, Professor Murakami, and everyone at the Office for the Promotion of Global Human Resource Development. We also appreciate the interactions and assistance we received while in Sri Lanka, including Mr. Mizukoshi at the Japanese Embassy in Sri Lanka, Mr. Inoue, the head of JETRO Colombo Office, Mr. Oi, Mr. Yamada, and Ms. Ide from JICA, as well as Eng. Sudath Rathnayake. We'd like to extend our thanks to Chairman Tanaka and Mr. Nozaki from Colombo Dockyard, and all the LNBTI students we spent time with, especially, Anouk, Sandewna, Dinithi, Akindu, Enuk, Sasindu, Anushka. We are also grateful to the students at high school, Ms. Manel and others at the cinnamon plantation, our guide Mr. Kernel, and our driver Mr. Priyantha. Lastly, we extend my thanks to Ambassador Rodney Perera and Mr. Kapila Kumara from the Sri Lankan Embassy in Japan for arranging a visit upon our return.

We believe that without the cooperation of all of you, we would not have been able to learn so much during our studying abroad in Sri Lanka. In the future, we hope to apply what we have learned during this stay and continue to learn and take proactive actions.